

*ニュース106号が刷り上がった。

4. 行事

(野崎評議員)

*2月例会は中止。6月例会は会長講演で、6月14日午後2時の予定。

(水谷評議員)

*本年度年会は10月11日～13日に決定。

5. 日本学術会議関係 (木越評議員)

*IAGCが, "Applied Geochemistry" 発刊につき意見を求めている。

Ⅲ. 議事

1. 入退会 (大隅評議員)

*入会 正会員2名: 和田恵治, 三宅 隆

*退会 正会員17名 秋山梯四郎, 阿部正宏, 荒井康司, 糸魚川忠平, 猪木幸男, 梶谷 敬, 香山 勲, 坂本尚史, 地引久和, 杉浦精治, 鶴見浩一郎, 仲野尚一, 野又 章, 番場猛夫, 二間瀬 洌, 町田喜弘, 水野篤行
以上を承認。 会員現況は以下のとおり

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1985年10月31日	894	13	7	914
入会	2	0	0	2
退会	17	0	0	17
1985年12月31日	879	13	7	899

2. 役員選出細則改訂小委員会の設置について

*前期評議員会からの引き継ぎ案件である役員選出細則改訂については、一國副会長のもとに小委員会を設置して、早急に措置する必要のある改訂事項は本年度の年会に提案できるよう取りまとめをお願いする事とした。

3. 学会賞設置について

*増田会長から、日本の地球化学の振興と活性化という観点から検討いただきたいと、議題を説明。

*まず、予算面から検討。「86年度予算には基本財産充当積立金として50万円が計上しており、将来賞金を出すような事になった場合にもこれを充実してゆくことで対応できる。その場合学会の法人化が、基金の充実のための寄付受け入れに当たって効果的であろう。」・「学会活動の活性化がねらいなのであれば、むしろ賞金はなじまないのではないか。」との意見がだされた。

*ついで、他の学会の例を検討。鉱物学会・地質学会・海洋学会・鉱山地質学会・日本化学会の例が賞の種類(対象・賞金額・財源)、選考方法等について議論された。また、本日欠席の秋山評議員の書面による賛成の意見も紹介された。

*ここで、増田会長の私案(例えば柴田賞・日本地球

化学会賞・論文奨励賞・応用地球化学賞・環境地球化学賞・日本地球化学会特別功労賞・教育出版普及賞といった名の多様な賞を設置する。会の財政からの負担はメダルと賞状程度を考慮。)が示され、「学会活動の活性化の観点からは功労賞の提案は評価できる。地球化学の周辺の仕事にも光を当て、また学会への求心力となり得るという意味でも多様な賞を設定する方向で推進して欲しい。」・「学会誌のためには論文賞をぜひ設置したい。」等の賛成意見が表明された。

*分野間のバランスなど選考に伴って起こりがちな種々の不満への配慮や、多面的な本会の体質を反映した賞のあり方を考えての私案である旨、増田会長から説明があり、増田会長のもとに作業グループを作って、具体的な賞の設置のための案を練ることとした。

4. 科学研究費補助金の部・分科・細目について

*このことについては、変更を日本学術会議から提案できるので本会の意向を地球化学・宇宙化学研究連絡委員会での議論に反映させるため検討いただきたい旨、増田会長から議題の説明。

*地球化学の宣伝普及・アイデンティティの確立といった観点からも重要な問題である事を確認。「地球化学」として、「理学」の中に分科を作る・複合領域もしくは「地球物理学」分科のもとに移す・あるいは「分析・地球化学」はそのままに、別個の細目を別の位置に立てるなど種々の可能性について検討。環境科学会設立や複合領域「海洋科学」新設の提案等の他学会の動向が紹介され、また現状での科学研究費補助金審査の状況も議論された。

*本会と日本化学会との関係についても留意すべきであるとの意見も出され、この場では評議員間での意見交換にとどめ、結論を出すことはしないことにした。

5. その他

*来年度には例会に代えて春季シンポジウムおよび懇親会を開催する事を、幹事会で計画しているとの紹介があり、多数の評議員からこの試みに賛成意見の表明があった。

編集者 松久幸敬

〒305 茨城県筑波郡谷田部町東1-1-3
地質調査所 鉱床部

電話 0298 (54) 3636

発行所 日本地球化学会

〒113 東京都文京区弥生2-4-16
学会センタービル (4F)

日本学会事務センター内

電話 東京03 (817) 5801

振込先銀行 三井銀行上野広小路支店

普通預金 口座番号 920-833

日本地球化学会ニュース

No. 109

1987. II. 10

1987年度日本地球化学会春季シンポジウム

——地球化学の最近の話題——

主催 日本地球化学会

日時 4月6日(月) 10:00~17:00

会場 東京大学教養学部 11号館

東京都目黒区駒場3-8-1

(電話03-467-1171, 内線629 綿抜邦彦)

コンビーナ 綿抜邦彦・増田彰正・一國雅巳・野崎義行

プログラム

午 前 (10:00~12:00)		休 憩	14:50~15:10
あいさつ	10:00~10:10	5) 古気候と海洋循環	15:10~16:05
日本地球化学会会長 増田彰正		大場忠道 (金沢大教養)	
1) 海嶺の地球化学——ODP掘削孔504Bの成果		6) IGBPに関連する地球化学研究について	
	10:10~11:05		16:05~17:00
酒井 均 (東大海洋研)		松本英二 (地調海洋地質)	
2) 1986年8月のカメルーン・ガス災害			
	11:05~12:00		
日下部 実 (岡山大地球内部研)		懇親会 (於 生協食堂)	
大隅多加志 (東工大理)		会費 4,000円	
昼 食	12:00~13:00	懇親会に参加ご希望の方は、同封のはがきにてシン	
		ポジウム事務局 (東大教養 綿抜邦彦) までお申込み	
		ください。申込み締切 3月21日(土)。なお、会費	
		は当日会場にてお支払い下さい。	
午 後 (13:00~17:00)			
3) 星の進化と元素合成	13:00~13:55		
野本憲一 (東大教養)			
4) 地球化学と地震予知	13:55~14:50		
脇田 宏 (東大理地殻化学)			

1987年度の日本地球化学会年会および総会は、10月末に東邦大学医学部 (東京大森) で開催されます。

○日本地球化学会授賞規程決まる

本会における学会賞の設置については、将来計画委員会報告書（ニュース No. 106参照）や増田会長の所信表明（ニュース No. 107参照）においてもその必要性が指摘されており、その内容について検討が重ねられてきたが、昨年度の総会において学会賞授賞規程案が可決され、本年1月1日より施行の運びとなった。

なお、受賞者の選考についてのお知らせは、次号のニュース（4月末発行予定）に掲載の予定である。

日本地球化学会授賞規程

第1条：日本地球化学会（以下本会という）につぎの賞を設ける。

柴田賞

日本地球化学会賞

日本地球化学会奨励賞

日本地球化学会功労賞

第2条：柴田賞は、地球化学の発展に関し、学術上、顕著な功績のあった者に授与する。

第3条：日本地球化学会賞は、地球化学の分野で、特に優秀な業績をおさめた本会会員に授与する。

第4条：日本地球化学会奨励賞は、地球化学の進歩に寄与するすぐれた研究をなし、なお将来の発展を期待しうる本会正会員に授与する。
原則として、受賞者の年齢は授賞の期日において満35歳以下であることを要する。

第5条：日本地球化学会功労賞は、我が国の地球化学あるいは本会の発展に関し特に寄与のあった者に授与する。

第6条：受賞者の選考は、別に定める「受賞者選考細則」により受賞者選考委員会（以下委員会という）において行う。

第7条：委員会委員は、評議員会の承認を経て本会会員の中から会長が委嘱する。ただし委員長は評議員であることを要する。

第8条：委員会は選考の結果を評議員会に報告し、評議員会において授賞を決定する。

第9条：本規程の変更は評議員会によって定める。

第10条：本規程は、1987年1月1日より施行する。

○役員選出細則の改訂

日本学術会議の会員選出方法の変更に伴い、本会の役員選出細則に若干の改訂が必要となったため、評議員会内に役員選出細則改訂小委員会（委員長一國雅巳副会長）を設けて検討を進めていたが、昨年度の総会

で下記の3点の改訂が報告された。

（1）第6条第2項の評議員の選出について「全国を日本学術会議方式のブロックに区分し」とあるのを、「全国を下記の7ブロックに区分し」と改める。なお、7ブロックの内容は従来の日本学術会議方式のブロックと同じである。

（2）従来の第9条を削除し、第9条として「本細則の変更は評議員会の議決による」を新たに入れる。

（3）付則として「本細則は1986年6月14日より施行する」を追加する。

○ International Geosphere-Biosphere Program (IGBP) について

米国 National Research Council (NRC) および国際学術連合 International Council of Scientific Unions (ICSU) が国際研究協力と呼びかけている上記プログラムについて、わが国においても、積極的な研究者の間ではすでに具体的な活動が始まっており、日本学術会議の関連する研究連絡委員会等では討論会が開催されている。本会においても、「日本地球化学会は、基本的には IGBP に積極的に参加する方向で対応する」という方針が評議員会構成員全員の賛成を得て確認された。

本会としては IGBP 委員会（仮称）を発足させることになったが、IGBP 計画についての会員からのご意見をニュースにお寄せ下さい。

○本会名誉会員 渡辺武男先生が逝去されました

本会名誉会員 渡辺武男先生（東京大学名誉教授、日本学士院会員）は、昭和61年12月18日に逝去されました。謹んで哀悼の意を表します。

告別式は12月28日に行われ、本会より生花弔辞を献呈いたしました。

地球化学会ニュース No. 106（1986年1月30日発行）の名誉会員の紹介記事にございますように、先生は、鉱床学、鉱物学ならびに地球化学の学際的分野において、国際的に評価の高い研究を数多く成し遂げられました。また、日本地球化学会の発足以来、長年にわたって評議員として、さらに1985年からは名誉会員として、地球化学および本会の発展に御尽力いただきました。

会員からの手紙

IGBP に関連する地球化学研究について

地質調査所 松本英二

今や人間活動は地球の自然環境を大きく変化させる程増大している。自然環境の変化は気候に影響を与え、食糧、水、エネルギー等の我々の生活に密接にかかわってくる。1990年代の国際的研究課題として取りあげ検討されている IGBP は、十年後、百年後の地球圏の自然環境を予測し、必要な対策に指針を与えるもので、時を得た重要な研究課題といえる。この IGBP では地球化学者の果たす役割はきわめて大きい。この事を IGBP の最重要課題となるであろう大気中の CO₂ の増大問題を例にあげて説明する。

CO₂ が今後どのような上昇カーブをとるかは、地球圏での炭素の循環に関する正しい知見が必要とされる。この炭素循環には、物理過程に加えて化学・生物過程が大きな役割をもっている。この循環研究では、大気、海洋および陸地での炭素量の見積り、各系間の移動速度の算定が必要である。そのためには、炭素含量の測定に加えて、¹³C と ¹⁴C の同位体の測定が必須である。

CO₂ の増加が気候や自然に与える影響については、実験や数値解析に加え過去の記録の解読も必要である。更新世から完新世における環境変化は、氷床、炭酸カルシウム、樹輪等の堆積物によく保存されている。堆積物から過去の自然環境を復元するためには、年代測定、炭素、酸素等の同位体の測定が不可欠である。

炭素循環や古環境復元で用いられる測定技術や解析手法の多くは、地球化学者にとって馴染深いものである。マウン・ロアでの大気観測、氷床の分析等 CO₂ 問題に果した地球化学者の業績は偉大なものであり、今後もこの分野での地球化学は重要な寄与を期待されている。CO₂ の問題は実学的要求ではあるが、この要求に答えるためには、基礎的な地球化学的知見の集積なくしては不可能である。また、狭い興味に閉じこもりがちで地球化学者が、学際的で汎地球的な研究へ飛躍する良い機会を IGBP は与えてくれると思う。

○水-岩石相互作用 (Water-Rock Interaction) 第5回国際シンポジウムについて

埼玉大学工学部 関 陽太郎

上記のシンポジウムは1986年8月7日（登録日）から8月12日まで、1日の Mid-session Field Trip をはさんで、アイスランドのレイキャビクにあるアイス

ランド大学で開催された。ポスターセッション型式の発表23を含め発表数170余で、3会場に別れて同時進行の形で講演がされた。日本からは発表数11、参加者は15名を越えていた。

全人口わずか24万人、国土の大部分は草も木もなく、アイスキュープがかなり広く分布しているこのアイスランドでありながら、おどろくほど多くの、有能で且つ活動的な地質、地球化学、地球物理の研究者・技術者がいることはつとに有名であったが、これらの人々と、それらの人々を支えた学生・市民・政府の地道な努力で、シンポジウムはスムーズに、且つ活気にあふれていた。8月13日～17日の間は、Post-session Field Trip がおこなわれ、第3紀～第4紀の火山岩地域が地熱地帯を中心に見学された。

8月11日の午後には Water-Rock Interaction グループのビジネスミーティングが、120名あまりの参加者のもとで開催された。この会ではカナダの B. Hitchon 氏が司会し、①このグループを構成している8つの小グループ (Interest Group) は設立以来15年もたっていて活動力にもぶり、グループ分けそのものが古くさくなっているから、WRI そのものの活性化のためにも再検討すべきであるという議論 ②次回の WRI の国際シンポジウムは1989年7月27日～8月1日にイギリスの Bath で開催され、そのための Secretary-General を W. M. Edmunds がつとめること ③過去12年もの間 WRI 全体の Chairman をつとめていた B. Hitchon 氏が辞意を表され、「あらかじめ5人の Executive Committee メンバーに次の Chairman として誰がよいか」質問しておいたところ、酒井均がよいという声がつよかった」と云われ、新しい Chairman の選考に入り、R. Fournier, J. Boon らの提案で酒井均氏を新 Chairman とすることに決定された。酒井氏が第一に手がける仕事は、次回の WRI-6 のために、Interest Group の再組織に関する問題提起の主旨を WRI 全メンバーにしらせ、意見を集大成しておくことである点で合意が成立した。

第6回地球・宇宙年代学および同位体地学国際会議に参加して一年代学の方針から一

東京大学理学部 中井俊一

第6回地球・宇宙年代学および同位体地学に関する国際会議は、昨年の6月30日から、五日間にわたり、ケンブリッジ大学において開催されました。全世界から800人ほどの研究者と同伴者が集まりましたが、日本からも30人ほどの方が参加されました。

ケンブリッジの街は、歩いて回るのに手頃な大きさで、歴史を感じさせる石づくりの建物がならんでいま

した。会議の参加者は、カレッジと呼ばれている寮に宿泊できたのですが、中には17世紀の建物に泊まれた方もいました。

会議の期間中は、日本の初夏を思わせるような、さわやかな好天に恵まれました。

今回の会議では、講演は五つの会場に分けて行なわれたため、おめあての発表を聞くために走って移動する人の姿も目につきました。一つの講演が終わると、かなりの人が動くこともあり、座長が次の講演を始めるのを、しばらく待たなければならぬこともありました。階段教室では、机の上を歩いて外へ出る人が多く、ラフな服装が多かったことも合せて、雰囲気の違いを感じました。

私は年代測定の新しい進歩とその応用のセッションで、新しい年代測定法であるランタン・バリウム法について報告しました。この方法は、 ^{138}La が電子捕獲をして ^{138}Ba へ壊変することを利用したもので、希土鉱物の年代測定に応用した結果を発表しました。発表時間の関係で、討論の余裕がなかったのですが、ANUの学生が個人的に質問にやってきました。ウラン・鉛法の仕事をしている人などに興味をもたれたようです。

私の聞いた分野では、ネオジウム同位体比を用いた研究が主流になっているという印象を受けました。同じ手法を用いた研究が多いなかで、どのように研究の独自性をだすか、今後考えていかなければならないと感じました。ウラン・鉛法による研究も数多く発表されましたが、その中でも二次イオン質量分析計を利用した研究が目につきました。ランタン・セリウム法の研究が、外国でも始められていて、田中・清水の両氏と合せて四件の報告がありました。レニウム・オスミウム法による研究の試みも、異なる装置を利用した三件の発表があり、今後の発展が期待できます。

自分の発表が済むと、リラックスして、ロンドンまで遊びに出た人もかなりいたようでした。夜遅く帰って来て、カレッジの塔の上に光る北極星の高さに、北の国にいることを実感したこともありました。

最終日になって天気が崩れ、展示の後片づけに忙しいVG社の社長は、夏は終ったと、灰色の空を見上げていました。翌朝、私は巡検へ向い、雨のケンブリッジをあとにしたのでした。

第6回地球・宇宙年代学および同位体地学国際会議に参加して一同位体地学の分野から一

富山大学理学部 吉田尚弘

会議が行われた初夏の英国は10年振りの暑さを迎え

ていた。厳しい暑さに関らず、800人を超える参加者が集い5日間にわたって討論が行われた。論文の詳細は別稿ですで紹介したので、本稿ではこの参加者数について考察したい。

参加者数の歴大さは欧州という地理的有利に加えて質量分析計の普及が大きく関わっているのであろう。その普及の程度は周知の通り、地球科学のあらゆる雑誌の各号で同位体（年代を含む）を扱う論文を数篇以上見かけないことはない程である。同位体を主としない論文でも、その表のいくつかの欄を割いて同位体の情報を挙げている程である。この様に少しでも同位体に関わった研究者が最新の情報を交換し合う機会なのだから参加者数も多くなろうというものである。

4年前日光で行なわれた前回の会議で最も印象に残ったのは、それまで神様と思っていた著名な学者がやはり人間だったという認識であった。第二に多くの研究者が論文の冒頭から論議を始めていることが印象的であった。今回第一の印象を感じなかったのは国際会議の経験の深浅によるとしても、第二の印象を受けなかったのは、そのせいではない。今回は各論文の測定数の多さが目立った。さらにその趨勢は、前回すでに萌芽があった通り多種同位体解析である。まず測定値があって、全体を見通した論議は二の次という感さえあった。出発点から同位体に関わってきた地球科学者は、その有用性の限界についてしばしば批判的ですからあるのに対して、新たに同位体を応用し始めた地球科学者は楽観的に見えた。しかし今振り返ってみると、この様に無批判とも言える同位体分析を行なうことは有効かつ測定可能なものを全て測るという当然の研究方法なのであった。今や同位体は決して特殊な指標ではなく、他の一般的な物理的・化学的指標と同等の取扱いをされる段階になったということである。複数の年代測定法を比較検討して岩石の熱履歴を推定する研究などは、現実的な解答の出し方をして、前述の多種同位体解析の好例であろう。

町の映画館で行なわれたBroeckerやWasserburgらの全体講演や、懇親会の席上での主催者側の挨拶などは大変機知に富むもので、異なる分野でも同位体という同じ言語で語り合える楽しさを味わうことができた。それにしても英国製の投影機は、しばしば不調で「次は日本製を」という声がかかる程であった。時間厳守が徹底しすぎて十分な討論が会場では難しかった。この様な運営面の不都合に対しても、Cambridgeという素晴らしい環境の中では、不満の声は高まらなかった。

日本学術会議だより No.3

第13期初めての勧告・要望出る

昭和61年11月 日本学術会議広報委員会

日本学術会議は、去る10月22日から24日まで第101回総会（第13期の4回目の総会）を開催しました。

今回の「日本学術会議だより」では、今総会で採択され、政府に勧告した「国立代用臓器開発研究センター（仮称）の設立について」及び要望した「我が国における学術研究の推進について—大学院の充実等を中心として—」を中心として、同総会の議事内容をお知らせします。

また、来年1月に開催を予定している本会議主催の公開講演会等についてお知らせします。

総会報告

総会はその初日に、会長からの経過報告、各委員会報告に続き、規則などの改正、勧告・要望の提案がなされ、午後の各部会での審議の上、2日目午前中にこれらの採決が行われた。なお、前日、21日午前中に全員が出席する連合部会が開催され、これらの案件の予備的な説明・質疑が行われた。3日目は午前中、常置委員会、午後は特別委員会が開催された。

総会の冒頭に先に逝去された、第3部会員高宮 晋氏（部長）を追悼した後、新たに任命された野口 祐会員が紹介された。また、チェルノブイリの原子力発電所事故について、原子力工学研究連絡委員会委員長から8回の会合における検討に基づく、この研連の見解「原子力の平和利用と安全性」が委員長長の国際原子力機関での事故調査検討状況と共に報告された。

総会で決定された事項は、すべて「日本学術会議月報」11月号に詳しく掲載されるので、主要な項目の説明にとどめる。まず、第1常置委員会で鋭意検討されてきた、会則の改正、規則及び内規等が次のように採択された。会則の改正は、「衛生学研連」から「環境保健学研連」への名称変更である。規則の改正は、昭和63年度の第14期会員推薦手続きの手直しであって、その第1は、学術研究団体（学・協会）の登録に際し、従来の方式に加えて会員名簿などの添付を要請すること、会員推薦の場となる「推薦研連」に登録する学・協会を確保する方策などである。第2は、この登録された学・協会が会員候補者を届け出る際の記載事項を追加して、推薦人の判断資料を充実させることである。最後に推薦研連が熱工学研連から機械工学研連へ、衛生学研連から環境保健学研連へと変更された。

内規の改正は、日本学術会議の活動の周知と学・協会との連絡・協力を維持・強化するために、「連絡学・協会」の名の下に多くの学・協会との緊密な連絡を保ってきたが、今回、これを「広報協力学術団体」と改称し、別項のようにさらに広い範囲の学・協会と連携を図るようにしたものである。

特別委員会のうち、国際協力事業特委は任務を終了したので、それに代わり、人材養成などを含めて総合的・学際的・広域的な地域の研究機関のあり方を検討するために、「地域の研究推進特委」が設置され、直ちに委員を選出して活動を開始した。

本総会では、第7部提案の「国立代用臓器開発研究センター（仮称）の設立について（勧告）」、第4常置提案の「我が国における学術研究の推進について—大学院の充実等を中心として—（要望）」が採択され、直ちに内閣総理大臣始め関係諸機関等に送付した。これらの詳細は別項及び月報所載のとおりである。

第2日目午後、「高度情報社会の展望と課題」について自由討議を行った。

国立代用臓器開発研究センター（仮称）の設立について（勧告）

人体のある臓器が障害を受け、従来の治療によっては、もはやその機能の回復が不可能になった場合には、当然、死に至るわけであるが、近代医学は、その臓器の機能を他のもので代替することによって、未だ完全の状態と言えないまでも生命の維持を可能にしている。その一つの手段が人工臓器であり、もう一つが臓器移植である。両者は代替という同じ目標を持ちながら、全く異なった研究アプローチで、それぞれ独立したテーマとして発足し、今日の進歩をみている。例えば腎臓移植と人工臓器との関係では、両者の技術は全く異なっている。しかし、慢性腎不全の治療における両者の相補的効果は極めて高いものである。人工臓器と臓器移植とはあたかも車の両輪のような関係にあるので、医療の場において両者を一体化した医療システムが強く要求されている。

このような関係にある両者を合わせ、代用臓器と呼んでいるが、この研究が今後飛躍的に進めば、臓器疾患に悩む患者の治療に貢献することは間違いない。一方これら研究の我が国の現状をみると、個別的に極めて優れた成果を挙げているものもあるが、全体的にはまだ十分の研究体制が整っているとはいえない。その理由を考えると、臓器移植の面では、臓器取得に関連して、我が国の脳死問題を含む死の判定等人の考え方の相違に基づくと思われる問題が大きいことである。人工臓器の面では、基礎材料の研究に始まり、エネルギー、エネルギー変換機構、駆動機構や臓器機能の制御システムの開発などは、各分野の専門家による有機的な組織のもとでの研究が必要であるにもかかわらず、そのような研究体制が我が国にはなかったのである。

医学、薬学、生物学、理学、工学、農学にわたる分野の研究者が緊密な協力研究を行い、臓器置換を安全に、有効に行うため生体生理機構を解明しつつ、システムとテクノロジーを確立することが緊急に必要と考えられる。ただ本研究は臓器置換という生命の尊厳に係わる医の倫理問題が関係しているため、本研究センターの運営には、人文社会科学系の方々への参加を求め、また、本研究センター内の活動に係わっては、研究者の倫理的思考の行き過ぎを抑制し、社会の理解を深めるなど医の倫理を検討する組織の設置を計画し、運営機構が一方では開発研究にあたって独創的研究を積極的に推進し、臓器置換という医療がここに飛躍的に進展するよう期待したい。

詳細は日本学術会議月報11月号を参照されたい。

我が国における学術研究の推進について —大学院の充実等を中心として—(要望)

次の代を担う若い人達をどうしたら立派に育成することができるかという問題は、その国の将来を決める上で重要である。日本学術会議においても第13期活動計画の中にこの種の問題の重要性をうたっているが、これからは経済的のみならず学術的にも大きく世界に貢献する立場に置かれているだけに、独創的な若い人達を育成する必要があると強く思っている。

学術研究推進のための一つの大きな柱として若い研究者の育成、特に大学院の充実等を中心としてまとめる際、むずかしい基本的な問題点は、学問分野によって事情が著しく異なるが、今回の「要望」はおおむね各分野に共通する問題であり緊急性の高いものにしておいた。その中では学問の急速な進歩に対応し得るよう、長期的展望にたって大学院(必要な人員、設備、建物面積や経常費等)を抜本的に強化充実を図る必要性を強調し、さらに大学院における人材養成について基本的問題を踏まえて、大学が大学院の内容を自主的に検討し、改善すべき点は積極的かつ的確に実現していくことが必要である。

一方研究者の層をもっと厚くし、研究基盤を強化し、特に基礎的科学の分野の充実を図ることが急務である。研究者の交流その他、種々の問題があるが、一つの新しい建設的提言として地域的研究機構の設立がある。研究機器が年々性能が向上すると共にその価格が高くなる情勢下において、効率よく使う仕組みが要求されている今日、日帰りで見える地理的範囲に先端的研究機器を配置すると共に、その場を、その地域に特徴的なしな世界的レベルの独創的研究を育成する場とし、研究者の日常的交流、協力を、国内、国外、産官学の広い範囲にわたって図ろうとするものである。その他年々加速度的に盛んになる国際交流についても、特に若い研究者達が日常的に国際的競争の場の中で育成される条件を整えることが重要である。

この要望は大学院の充実という、考えようによっては当然の事柄が、現在あまりにも不十分である現実を前にして、国に対して、また大学自身に対して出されたものである。

詳細は、日本学術会議月報11月号を参照されたい。

広報協力学術団体の申込について

本会議では、第101回総会で内規の一部改正が行われ、従来の「連絡学・協会」は、名称を「広報協力学術団体」と改め、資格要件も大幅に緩和されました。「広報協力学術団体」とは本会議活動の周知を図るとともに、各分野の学術研究団体との緊密な連絡・協力関係を維持し、強化するため広報活動に協力してもらうために指定する団体です。詳細は事務局にお問い合わせください。

なお、登録学術研究団体、従来からの連絡学・協会は自動的に指定されたものとみなします。

公開講演会開催のお知らせ

本会議は、9月27日「21世紀の学術」をテーマとした公開講演会を開催したが、第2回目の公開講演会を次のように企画しているので、多数の方々の御来場をお願いしたい。

- ☆ テーマ 学問の自由と科学者の責任
- ☆ 日 時 昭和62年1月24日(土)13時30分～17時
- ☆ 会 場 日本学術会議講堂
- ☆ 演題及び演者
 - 科学研究の環境と科学者の責任(大木道則 第4部会員、東京大学理学部教授)
 - 学問の自由と教育の自由(大田 堯 第1部会員、東京大学名誉教授)
 - 生命科学の進歩と科学者の責任(渡辺 格第4部会員、北里大学衛生学部教授)

自由討議—高度情報社会の展望と課題—

この自由討議は今期に設置された、高度情報社会特別委員会のメンバーが、個人の立場で、来るべき高度情報社会の展望と課題についての意見を発表したものである。第3部竹内 啓(可能性と展望)、第5部平山 博(技術的展望と問題点)、第2部正田 彬(人権)、第4部坂井利之(人間)、第1部東 洋(教育)の各会員がそれぞれ付記したサブテーマについて問題を提起した。これに続いて、第7部梅垣洋一郎(医学・医療)、第6部飯田 格(情報と図書館)の各会員からコメントが提出された。

すべての部にまたがる広汎な分野からの発表であるから、その対象・論旨は多様であったが、あえて要約すると以下のようである。

これまでの「人」と「物」の社会に、これらと独立して「情報」が生まれた。情報の処理、通信(伝送)、記憶の超高速、巨大化と認識・識別の高度の発展により、労働形態・教育・医療も含めて社会を大きく変化させることが予想される一面、人権、人間疎外を始めとする影の部分にも十分に配慮する必要があると強調された。

なお、この自由討議は別途刊行される予定である。

財団法人日本学術協力財団設立

日本学術会議と密接に連携しつつ、本会議の成果を国民に還元するため出版事業や国際会議の計画策定などを行う財団法人日本学術協力財団(〒106 東京都港区西麻布3-24-20 TEL 03(403)2860)が10月17日、内閣総理大臣所管の公益法人として設立されました。

この財団は事業の一つとして、日本学術会議総会時における自由討議等を「日学双書」としてシリーズで発行・販売することにしており、当面、脳死をめぐる諸問題(11月初旬発行)、21世紀の学術(12月中旬発行予定)及び高度情報社会の展望と課題(2月中旬発行予定)が予定されています。

学術研究団体調査についてお願い

日本学術会議事務局では、昭和61年7月1日現在で全国の学術研究団体(いわゆる学・協会)の調査を実施しています。

この調査は、全国の学術研究団体の最近の活動状況を把握することを目的としており、主要な項目については、「総覧」として刊行することを計画しております。

当事務局で承知している各学術研究団体には、既に調査依頼を行っておりますが、最近発足した学術研究団体などで調査依頼が未着のところがありましたら、当事務局推薦管理事務局あてに御連絡くださるようお願いいたします。

- ☆ 申 込 方 法: 往復はがき(住所、氏名を明記)
- ☆ 定 員: 300人(先着順)
- ☆ 申込締切日: 昭和62年1月17日(土)
- ☆ 申 込 先: 〒106 東京都港区六本木7-22-34
日本学術会議事務局庶務課講演会係

多数の学協会の御協力により、「日本学術会議だより」に掲載していただくことができ、ありがとうございます。
なお、御意見・お問い合わせ等がありましたら下記までお寄せください。
〒106 港区六本木7-22-34
日本学術会議広報委員会
(日本学術会議事務局庶務課)
電話 03(403)6291

1986年度第2回日本地球化学会評議員会議事録

日時: 1986年6月14日 16時20分～19時30分

場所: 東京大学理学部化学教室会議室

出席者: 増田彰正会長、一國雅巳副会長、石渡良志、大隅多加志、梶原良道、兼岡一郎、佐藤和郎、清水洋、野崎義行、松葉谷 治、松久幸敬、松本英二、水谷義彦、綿拔邦彦 各評議員、鳥居鉄也監事

I. 前回の議事録を承認した。

II. 報告事項

1. 幹事会(大隅評議員)

* 4月1日東京大学理学部化学教室で、おこなった。
あらたに和文誌『地球化学』担当の幹事として石渡氏に参加していただくこととした。

2. 庶務(大隅評議員)

* 2月に日本学会事務センターとの打ち合せの席上、来年度から会員ファイルの漢字化を実施したいとの提案を受けた。

* 文部省昭和61年度科学研究費補助金研究成果公開促進費135万円の交付内定の通知を受けた。

3. 会計

(清水評議員)

* 前年度決算を資料に基づいて説明。いくつかの特別の要因で予算額にくらべて収入増があった。本年度の見通しは必ずしも楽観できない。雑誌への広告集めに御協力を願いたい。

(鳥居監事)

* 決算の監査を実施した。公正であると認めた。

4. 編集

(一國副会長)

* G. J. Vol. 20(1)を5月に発行した。現時点での完成原稿は17編。事年度の投稿受付数は、22編で例年並である。

(石渡評議員)

* 『地球化学』については、前編集担当小倉氏より引継を行った。第20巻1号のための原稿集めに努力している。評議員各位の御協力を願いたい。

* 2号以降については原著論文にこだわらず、例会・年会の課題討論からの特集など新機軸をうちだしたい。

(松久評議員)

* ニュース107号を5月に発行した。投書欄『会員からの手紙』を設け、4件を掲載した。

5. 行事

(水谷評議員)

* 本年度年会はニュースで案内のとおりの内容で実施する。

* 本会では年会の運営方針は開催地に大幅に任されているが、一部会員から昨年度の講演についての制限(原則一人一講演・2講演目はポスターセッション)が今年も適用されるのかと問い合わせがあった。本年は、特に制限を設けていない。

(野崎評議員)

* 6月例会は会長講演で、本日午後2時から東京大学理学部化学教室講義室で実施した。50名以上の参加者であった。

6. その他(増田会長)

* 本会会員・元評議員の山県 登氏にはチベットにて5月4日急逝された。本会からは葬儀に際し、会長名で弔電を打った。ご冥福をお祈りしたい。

III. 議事

1. 入退会(大隅評議員)

* 入会(7名): 正会員 赤木 右・今岡照喜・北川隆司・小関武宏・高橋 洋・巻出義紘・村江達士

* 退会(15名): 正会員 加藤敬香、河野俊一、北原重登、吉川恭三、久城育夫、熊坂繁太郎、桜井澄子、田中裕敏、寺町和宏、中村孝一、土永恒弥、森 和紀、山本和治、吉岡亀太

および賛助会員: 日揮株式会社

以上を承認。会員現況は以下のとおり

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1985年12月31日	879	13	7	899
入 会	7	0	0	7
退 会	14	1	0	15
1986年8月31日	872	12	7	891

* また小泉光恵会員の退会申出(1986年度末)を、あらかじめ承認した。

2. 例会にかわる”春のシンポジウム”について

* 野崎行事担当幹事より、問題点を整理した原案(1日1会場、東京近郊、コンビーナ方式の招待講演および公募の講演・懇親会)の説明をうけた。

* 総会での来年度行事計画としての承認・ニュースあるいは特別のアナウンスメントの発行についての期日およびそのための予算措置・会場の確保などについて議論。

1) 7・80名～150名規模の参加者。 2) 1会場1日で会場費と招待講演者のための若干の予算措置をおこなう。 3) 当面、東京大学教養学部を会場として想定する。 4) 来年度は試行的な意味合いで2回分の例会のかわりに実施するが、例会のありかたおよび評議員会の持ち方との関連は今後検討す

る。 5) 実施計画は幹事会で具体化する。 の諸点について合意した。

3. 役員選出細則改訂について (一國副会長)

*「会員の地域分布をみると現行の区分は妥当なので、日本学術会議方式の実質は変更しないことにする。」
「会則の体裁にあわせて若干の字句等の変更をする。」
「細則の変更が評議員会決定事項であることを明らかにする条項を加える。」との提案を承認。総会に対しては報告事項とすることにし、本日をもって細則施行日とすることを確認した。

4. 学会賞設置について

*増田会長から、授賞規程の原案を提示。一國副会長から今回論文賞の設定を見送った理由を説明。

*隔年に選考することの利点・奨励賞の年齢制限などについて議論がかわされ、またメダルと賞状以外に賞金を設ける可能性やその意義についての意見が出された。

*また《柴田賞 (仮称)》といった本会の最高賞的な賞の運用や性格づけ、設置の手続きについては慎重論も表明された。

*以上の議論を踏まえ、幹事会で検討をくわえ再度評議員会へ提案することとした。

5. その他

*87年度年会は東邦大学相川嘉正氏が引き受けて下さる予定。同氏には富山での評議員会に出席していただけるよう会長による評議員の追加委嘱の件を了承した。

*また、和文誌『地球化学』の改革の方向について自由に意見を交換した。

(以上)

1986年度日本地球化学会総会報告

議事次第

1. 開会宣言
2. 議長選出
3. 会長挨拶
4. 年会実行委員長挨拶
5. 1985年度事業報告および決算報告
6. 監査報告
7. 1986年度事業中間報告および会計中間報告
8. 役員選出細則改正の報告 (2 ページに掲載)
9. 学会賞設置の提案 (2 ページに掲載)
10. 1987年度事業計画および予算案
11. その他
12. 閉会

総会は10月12日、17時より18時まで富山大学理学部において会員約50名出席のもとに開催された。議長に相川嘉正氏 (東邦大学) が選出され、すべての議事は承認された。

1985年度事業報告

1. 会員状況

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1984年12月31日	863	12	3	875
入 会	53	2	0	55
変 更	-4	0	+4	0
退 会	33	1	0	34
1985年12月31日	879	13	7	899

2. 年会、委員会等開催数

年会 1 回 (10/17-19, 筑波), 総会 1 回 (10/18, 筑波), 評議員会 4 回 (2/2, 6/1, 10/16, 12/21), 例会 2 回 (2/2, 6/1, 東京), 幹事会 2 回 (4/4, 9/24, 東京), 会誌編集委員会 2 回, ニュース発行委員会 3 回, 行事委員会 2 回, 将来計画委員会 1 回, 広告委員会 2 回, 財政委員会 2 回

3. 会誌発行

G. J. Vol. 19 (1-6), 地球化学 Vol. 19 (1/2)

4. ニュース発行

Nos. 103, 104, 105 (計44ページ)

5. 名簿発行

6. 1986-1987年度役員選出

7. 学術会議会員推薦候補者および推薦人の選出および届出

8. 学会共催

1) 昭和60年度質量分析連合討論会

5/16-18 (豊橋市)

2) 第22回理工学における同位元素研究発表会

7/1-3 (東京)

3) 第1回 ESR 年代測定国際シンポジウム

9/1-4 (宇部市)

4) International Seminar on Laterite

10/14-17 (東京)

(IGCP PROJECT)

9. 例会

2/2 地球化学図

1) 地球化学図とは一その作製法と人間環境のインデックスとしての役割

椎川 誠氏

2) 地質調査所における地球化学図作製計画

伊藤司郎氏

6/1 サンゴ礁および海水変動をめぐる最近の話題

1) サンゴ礁によるネオテクトニズムと古環境解析

小西健司氏

2) 海水準変動とハイドロアイソスタシー

松本英二氏

1985年度決算報告書

収支決算書 (自 1985年1月1日 至 1985年12月31日)

収入の部

円 (予算, 円)

1. 会費	5,508,907	[5,000,000]
正会員	4,811,000	
学生会員	184,000	
賛助会員	330,000	
海外会員	137,907	
入会金	46,000	
2. 刊行物売上	4,620,575	[4,300,000]
別刷	1,056,665	
Back No.	3,563,910	
3. 広告料	578,000	[100,000]
4. 助成金	1,350,000	[1,600,000]
5. 雑収入	232,628	[40,000]
6. 前年度名簿積立金	750,000	[750,000]
7. 国際会議預金利息	596,352	[570,000]
8. 前年度繰越金	1,333,401	[700,000]
計	14,969,863	[13,060,000]

支出の部

円 (予算, 円)

1. 事業費		
出版費	8,705,531	[9,000,000]
印刷	7,100,341	
編集	900,000	
発送	705,190	
行事費	253,000	[270,000]
名簿積立金	0	[0]
名簿作成費	555,120	[600,000]
会員業務委託費	1,222,820	[1,450,000]
会員業務郵税	308,690	[370,000]
小計	11,045,161	[11,690,000]

2. 管理費		
庶務費	200,000	[200,000]
会議費	247,480	[150,000]
通信費	52,770	[30,000]
旅費	251,000	[400,000]
選挙費	30,600	[100,000]
雑費	60,260	[100,000]
会誌保管料	171,600	[171,600]
小計	1,013,710	[1,151,600]

3. 基本財産充当引当金	0	[0]
4. 次年度繰越金	2,910,992	[218,400]
計	14,969,863	[13,060,000]

貸借対照表 (1985年12月31日現在)

資産の部	
現金	8,434円
預金	1,817,912円
学会事務センター	4,270,646円
計	6,096,992円
負債・正味財産の部	
負債	3,186,000円
前受会費	3,186,000
名簿積立	0
正味財産	2,910,992円
計	6,096,992

1986年度事業中間報告

1. 会員状況 (1986年8月31日現在)

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1985年12月31日	879	13	7	899
入 会	21	1	0	22
退 会	15	1	0	16
1986年8月31日	885	13	7	905

2. 年会、委員会等開催数

年会 1 回 (10/11-13, 富山), 総会 1 回 (10/12, 富山), 例会 1 回 (6/14, 東京), 評議員会 3 回 (2/1, 6/14, 10/10), 幹事会 4 回 (2/1, 4/1, 9/6, 10/2, 東京), 会誌編集委員会 2 回, ニュース発行委員会 3 回, 行事委員会 2 回, 広告委員会 2 回

3. 会誌発行
G. J. Vol. 20 (1, 2)
4. ニュース発行
Nos. 106, 107, 108 (計46ページ)
5. 学会共催
第23回理工学における同位元素研究発表会
7/1-3 (東京)
6. 例会
6/14 希土類元素の地球化学：新旧の話題
増田彰正氏

1986年度会計中間報告(1986年6月30日現在)

1. 収入の部		
科目	金額(円)	(予算, 円)
1. 会費収入	5,986,200	[6,600,000]
2. 刊行物売上	2,394,419	[5,000,000]
3. 広告料	479,000	[500,000]
4. 助成金	0	[1,500,000]
5. 雑収入	9,054	[30,000]
6. 前年度名簿積立金	0	[0]
7. 国際会議預金利息	57,609	[60,000]
8. 前年度繰越金	2,910,992	[1,000,000]
計	11,837,274	[14,690,000]
支出の部		
科目		
1. 事業費		
1.1. 出版費	2,209,550	[9,300,000]
1.2. 行事費	215,000	[270,000]
1.3. 名簿積立金	250,000	[250,000]
1.4. 名簿作成費	0	[0]
1.5. 事務委託費	0	[1,450,000]
1.6. 会員業務郵税	3,740	[170,000]
事業費小計	2,678,290	[11,440,000]
2. 管理費		
2.1. 庶務費	200,000	[200,000]
2.2. 会議費	107,915	[200,000]
2.3. 通信費	15,000	[30,000]
2.4. 旅費	132,000	[300,000]
2.5. 選挙費	0	[0]
2.6. 雑費	3,150	[100,000]
2.7. 会誌保管料	0	[171,600]
管理費小計	458,065	[1,001,600]
3. 予備費	0	[500,000]
4. 基本財産充当引当金	500,000	[500,000]
5. 次年度繰越金	-	[1,248,400]
計	3,636,355	[14,690,000]

1987年度事業計画

1. 年会 1回 (東京, 東邦大学)
2. 総会 1回 (東京, 東邦大学)
3. 春季シンポジウム 1回 (東京, 東京大学教養学部, 4/6)
4. 評議員会 4回
5. 幹事会 2回
6. 会誌発行
G. J. Vol. 21 (1/6), 地球化学 Vol. 21 (1, 2,),
G. J. Index
7. ニュース発行
3号 (Nos. 109-111)
8. 学会共催
第24回理工学における同位元素研究発表会
9. 名簿発行・1988-1989年度役員選出
10. 学会賞
11. その他

1987年度予算

収入の部		
科目	金額(円)	(前年度予算,円)
1. 会費収入	6,600,000	[6,600,000]
2. 刊行物売上	4,300,000	[5,000,000]
3. 広告料	300,000	[500,000]
4. 助成金	1,350,000	[1,500,000]
5. 雑収入	30,000	[30,000]
6. 前年度名簿積立金	250,000	[0]
7. 前年度基本財産充当引当金	500,000	[0]
8. 国際会議預金利息	0	[600,000]
9. 前年度繰越金	3,200,000	[1,000,000]
計	16,530,000	[14,690,000]
支出の部		
科目	金額(円)	(前年度予算,円)
1. 事業費		
1.1. 出版費	9,950,000	[9,300,000]
会誌等印刷費	8,300,000	[7,700,000]
編集費	900,000	[900,000]
発送費	750,000	[700,000]
1.2. 行事費	270,000	[270,000]
1.3. 学会賞経費	100,000	[0]
1.4. 名簿積立金	0	[250,000]
1.5. 名簿作成費	600,000	[0]
1.6. 事務委託費	1,600,000	[1,450,000]
1.7. 会員業務郵税	200,000	[170,000]
事業費小計	12,720,000	[11,440,000]

2. 管理費		
2.1. 庶務費	200,000	[200,000]
2.2. 会議費	270,000	[200,000]
2.3. 通信費	30,000	[30,000]
2.4. 旅費	300,000	[300,000]
2.5. 選挙費	80,000	[0]
2.6. 雑費	80,000	[100,000]
2.7. 会誌保管料	171,600	[171,600]
管理費小計	1,131,600	[1,001,600]
3. 予備費	500,000	[500,000]
4. 基本財産充当引当金	500,000	[500,000]
5. 次年度繰越金	1,678,400	[1,248,400]
計	16,530,000	[14,690,000]

○昭和62年度「原子炉等の施設」の大学共同利用の募集

1. 趣 旨 原子炉による照射およびこれに関連する研究を行うもので日本原子力研究所, 立教大学原子力研究所, 近畿大学原子力研究所の利用が必要な研究に限ります。
2. 申込資格 全国大学の助手以上の職にあるものとします。(協力者は大学院生も可)
3. 申込方法 所定の申請書2部 (用紙は申込先へ請求する)
4. 審 査 各共同利用委員会で, 研究課題の採否, 経費の査定等を審議します。
5. 申込期限 昭和62年1月31日
6. 申込先 (1)日本原研, 立教原研利用は
問合せ先 〒113 東京都文京区弥生2-11-16
東京大学原子力研究総合センター事務部業務掛
☎03-812-2013
(2)近畿大学炉利用は
〒565 大阪府吹田市山田丘2-1
大阪大学工学部総務課研究協力掛
☎06-877-5111
(内線4044)
実験問合せは近畿大学原子力研究所管理室
☎06-721-2332
(内線258)

○1989環太平洋国際化学会議について

アメリカ化学会, カナダ化学会, 日本化学会の共催により表記会議が開催されます。1984環太平洋国際化学会議の際と同様, 本会もこれを後援することといたしました。つきましては下記のような案内が本会あて届いていますのでお知らせします。
1989環太平洋国際化学会議のシンポジウムテーマおよび日本側オーガナイザーの募集

1989環太平洋国際化学会議実行委員会
表記国際会議が1989年12月17-22日の間, アメリカ合衆国ハワイ州ホノルル市において日本化学会, アメリカ化学会, カナダ化学会の主催で開催されます。一般講演の募集は1988年に改めて行ないますが, 今回は下記要領にてシンポジウムテーマの募集を行ないます。アメリカ・カナダの化学者と連絡がついていなくても結構ですので, ふるってご応募をお願いします。

記

1. シンポジウムテーマ締切日: 昭和62年4月末日
2. 必要事項: テーマおよび責任者 (できればアメリカ・カナダの責任者も加える)
3. 申込先: 〒101 千代田区神田駿河台1-5
日本化学会 1989環太平洋国際化学会議係
電話 (03-292-6168)
4. 採否決定: 昭和62年7月末日 (化学と工業9月号に発表)
以上は一応の締切ですが, 遅れてきたものについても順次考慮されます。これらの最終決定は1988年10月末日。

* * *

今回の会議は, 9つの分野に分けて行ないます。各分野の専門についてのお問い合わせは, 下記の責任者をお願いします。

Agrochemistry	[高橋正三 (京大農)]
Analytical	[赤岩英夫 (群馬大工)]
Applied	[村上雄一 (名大工)]
Bioscience and Technology	[広部雅昭 (東大薬)]
Inorganic	[大滝仁志 (東工大総理工)]
Information Transfer	[藤原 譲 (筑波大電子情報)]
Macromolecular	[今西幸男 (京大工)]
Organic	[園田 昇 (阪大工)]
Physical	[田隅三生 (東大理)]

○第24回理工学における同位元素研究発表会発表申込のご案内

この研究発表会の目的は, 異なった専門分野の研究者が一堂に会し, 同位元素および放射線の利用の技術

を中心とした研究, およびその技術の基礎となる研究の発表と討論を行い, 各専門分野間の知識と技術の交流を図ろうとするもので, 日本地球化学会も共同主催者のひとつです。

なお, 発表は口頭発表 (1 件15分以内, 原則として OHP 使用) とポスター発表 (90cm×150cm×2 枚) とします。

会期: 昭和62年 6 月 29 日 (月) ~ 7 月 1 日 (水)

会場: 国立教育会館 (東京都千代田区霞が関 3 - 2 - 3)

発表者の資格: 発表者が所属する主催学・協会の年会 (大会) 等の規定または慣例に従います。

発表申込み: 所定の申込書 (1 件 1 通) によりお申込み下さい。所定の申込書は下記あて請求して下さい。

〒113 東京都文京区本駒込 2 - 28 - 45

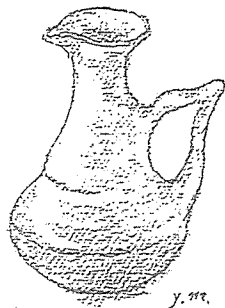
日本アイソトープ協会内

理工学における同位元素研究発表会運営委員会

発表申込締切: 昭和62年 2 月 28 日 (土) 必着

講演要旨: 発表申込みがあり次第, 所定の原稿用紙をお送りします。口頭発表, ポスター発表とも 1 件原稿用紙 1 枚です。

講演要旨原稿締切: 昭和62年 4 月 15 日 (水) 必着



○日本地球電気磁気学会の名称の変更について

「日本地球電気磁気学会」の名称が, 62年 4 月より, 「地球電磁気・地球惑星圏学会」と変更になります。和文名と並んで, 英文名も「Society of Geomagnetism and Earth, Planetary and Space Sciences」となりますのでご報告致します。日本地球電気磁気学会発足以来 40 年にして, 会員数も 550 名を越え, 会員の研究対象も, 電離圏物理, 地球電磁気現象, 岩石磁気などから, 次第に, 中層, 超高層, 磁気圏, 太陽~地球間空間それに惑星圏の科学 (理工学) へと広がってきました。そこで, 会員の研究活動の内容に適わしい学会名を, という要望が興り, 今回の会名変更が実現しました。学会名改称を機に, これらの分野の研究テーマを志す新しい会員が入会して下さることを願ってやみません。

なお, 学会誌「Journal of Geomagnetism and Geoelectricity including Space Physics」(略称: JGG) の誌名変更は, 今回は行なわないことになりました。(東大宇宙線研究所・山越和雄)

編集者 松久幸敬

〒305 茨城県筑波郡谷田部町東1-1-3
地質調査所 鉱床部

電話 0298 (54) 3636

発行所 日本地球化学会

〒113 東京都文京区弥生2-4-16
学会センタービル (4F)

日本学会事務センター内

電話 東京03 (817) 5801

振込先銀行 三井銀行上野広小路支店
普通預金 口座番号 920-833

215-314

日本地球化学会ニュース

No. 110

1987. V. 26

1987年度年会は東邦大学で開催

委員長 相川嘉正

電話 03-762-4151 内線 2551, 2555

郵便振替 東京 9-114756

(1987年度日本地球化学会年会)

年会は日本地球化学会の主催, 日本化学会の共催です。

東京での宿泊について

東急観光 (株) 大森営業所でお世話します。所定の申込用紙を用いて, 同営業所あてお申込下さい。

日時 11月5日 (木) ~ 7日 (土)

会場 東邦大学医学部 (東京都大田区大森西 5 - 21 - 16)

内容 一般講演, 課題講演およびポスターセッション
課題

- 1) 地球化学と医学の接点
- 2) 最近の伊豆半島周辺の地球化学
——火山, 温泉, 地質——
- 3) 東京湾および東京湾にそぐ河川の地球化学

懇親会 11月6日 (金) 18時から大森東急イン (JR 大森駅ビル) にて, 会費 4,000 円 (学生 3,000 円)

講演申込締切 7月18日 (土) 必着

申込受付後, 講演要旨用原稿用紙をお送りします。

講演要旨原稿締切 9月5日 (土)

要旨集予約, 懇親会, 小集会申込締切 9月26日 (土)

以上の申込には, 必ず所定の用紙を用いて下さい。用紙がない場合には年会準備委員会宛にご請求下さい。なお, 小集会を希望する方はハガキで別途お申込下さい。

要旨集代 (3,500 円) および懇親会費 (4,000 円または 3,000 円) は 9 月 26 日までにご送金下さい。

申込先および連絡先

〒143 東京都大田区大森西 5 - 21 - 16 東邦大学医学部内 1987年度日本地球化学会年会準備委員会

会員名簿作成の調査

1987年度は「会員名簿」の発行年であり, つきましては, 本ニュース同封の「返信」に必要事項をご記入の上, 折り返しご投函下さい (6 月 30 日締切)。

返信記入上の注意

1. 返信用葉書に記載されている各項目は学会事務センターのコンピュータに登録されている会員基本情報の内容です。名簿の訂正はこのファイルに基づいて行ないますので変更のある項目を赤ボールペンでご訂正下さい。
2. 回答のない場合は名簿の正確さを欠くだけでなく学会誌の発送等郵便が届かなくなる可能性があります。(なお, 連絡先 (自宅ないし所属) には○印を付して下さい。)
3. 変更のない場合にも必ず返信葉書を返送して下さい。
4. 今後とも会員基本情報の内容に変更が生じた場合, 必ず学会事務センターへ連絡下さるようお願い申し上げます。

日本地球化学会1988・1989年度役員選挙の 立候補者および推薦候補者の届出について

1987年5月6日
日本地球化学会役員選挙管理委員会

本会会則により1988・1989年度役員の選挙を次の日程で行ないます。

立候補者・推薦候補者締切	7月31日必着
選挙公報・投票用紙・会員名簿発送	9月14日
投票締切	10月19日必着
選挙結果公表（総会）	11月6日

つきましては、下記の要領で、会長・副会長・監事・評議員に対してそれぞれ立候補者および推薦候補者の届出をしていただくようお願いします。

1. 会長1名、副会長1名、監事1名、評議員20名を選出します。
2. 立候補者の届出は、届書を立候補者自身が、(1) 本委員会に持参するか、または(2) 本委員会宛に送付して下さい。
3. 推薦候補者の届出は、推薦候補者名と推薦者名

会員からの手紙

南極ロス海におけるボーリング試料について

静岡大学理学部地球科学科 和田秀樹

昨年十月から十一月にかけて南極ロス海の海水上から海底ボーリングが行われ、海底下700メートルに及ぶほぼ連続した柱状試料が得られました。本ボーリングはニュージーランドが主催し日本やアメリカが参加した国際共同研究プロジェクトによって行われた学術ボーリングで、その目的は新生代における南極大陸の氷河の発達歴史あるいは南極横断山脈形成の歴史を解明することにあります。コアは現在ニュージーランド、ヴィクトリア大学のP. J. Barrett教授を中心として地質、岩石、地球化学、地球物理などの各分野から編成されたチームによって解析中であり、堆積学的なコアの記載は間もなく公表され、その他の研究は本年中には成果がまとまり、Initial Reportとして明年早々には公表される予定です。

を記した届書に推薦候補者の承諾書をそえて、推薦者またはその代表者が、(1) 本委員会に持参するか、または(2) 本委員会宛に送付して下さい。なお役員選出細則第8条により、次の方々は次期評議員に選出することが出来ません：

金森 悟、川辺岩夫、佐藤和郎、清水 洋、中井信之、野崎義行、松久幸敬。

4. 第2項と第3項に記した以外の方法で届出が行なわれた場合には、届書を受付けることが出来ません。郵送の場合は、封筒の表に(選挙)と記入し、「書留郵便」として下さい。
5. 届出の締切は、1987年7月31日(必着)です。
6. 本委員会の所在地は次の通りです。

〒113 東京都文京区弥生1-1-1
東京大学地震研究所 佐藤和郎
電話 03-812-2111 内線5769

本ボーリングは、南極地域で掘削された最長のコアであるという重要性もさることながら、ニュージーランドとして巨費を投じ、極寒の厳しい環境下で大変な努力によって得られた貴重な試料です。このボーリングの成功には、P. J. Barrett教授の誠実な人柄とそれを支える研究者、技術者、支援者の見事なチームワークがあったことを覚えずにはられません。日本側の窓口は、国立極地研究所(神沼教授担当)で、筆者は日本が分担することになっていたボーリングに伴うガス分析担当を主目的として参加しました。本コアは、今後日本の研究者にも広く使用する道が開かれていて研究計画を立て極地研究所を通じ申し込みれば試料を入手することが可能です。興味を持たれる方は是非積極的に参加下さるよう希望いたします。コアの概要、各研究項目等については、極地研究所(神沼教授)もしくは筆者に問い合わせ下さい。

ロス海周辺での日本の科学者の研究は、1970年代前半に行われたDSDP(Dry Valley Drilling Project)などで大いに貢献し、特に地球化学の分野では、多くの

研究者が参加し業績を残しています。南極は、現在特異なところではありますが、地球化学の面からも地球の歴史の面からも貴重な試料を提供してくれる所です。今回参加させて頂き、いま尚夢が有り人類にとって極寒のオアシスともいえる緩衝地帯になっているという別の意味での特異な役割も感じられましたが、それも国際関係の中でどうなるかわかりません。それでも多くの国際協力が進み日本の役目も随分と大きいと思われました。なかなか出かけるのに億劫なところですが地球化学にとっても更に多くの人材の参加と努力が必要であると感じられました。

井

小沼直樹著「宇宙化学・地球化学に魅せられて」を読んで

地質調査所 吉川清志

私は、筆者から直接教えを受けたわけでもなく、適任ではないと思いますが、依頼を頂きましたので、浅学ながら筆を取らせていただきました。

この書は、筆者が雑誌等に発表した解説、随筆、評論などをまとめたもので、内容としては、アラユルニウム、酸素同位体温度計、隕石・宇宙化学、SBシステムティックからユーリー評伝に及ぶ広範囲なものとなっています。本の性質上、統一的な体裁にはなっていませんが、各章とも筆者の高い情熱、アイデアの泉とも思える創造性、鬼気迫るまでの実行力がひしひしと伝わって来ます。

例えば、アラユルニウム計画において、その発端から、様々な専門の人達との交流の中で、しだいにイメージがまとまっていき、体系を成していく様子が語られるくだりなどは、当事者だけが味わうことができる感動が見事に表現されています。

ユーリー評伝においても筆者の個性が感じられ、この偉大な科学者も最初は小学校教諭をした後、心理学を志して大学へ入学したこと、そのつもりが“模範的な教師”に出会うことにより、科学に魅惑されたこと、開放的で斬新な雰囲気の研究を次々と発展させていったことなど、いろいろなエピソードを描きつつ、言葉の端々に筆者の研究観がうかがえます。

また、地球化学、宇宙化学に対する取り組み方についても、所々に具体的な方策を交えつつ記されており、創造的な研究を拓いていこうとする真摯なストイックなまでの研究生活の一端を知ることができます。

この本を読んで、筆者の偉大な足跡に改めて敬服するとともに、出版に際して努力された方々に敬意を表したいと思います。

“Geothermodynamic Data”に関するCODATAの作業に御協力を

岡山大学地球研 木島宣明

あるきっかけで私はCODATA(Committee on Data for Science and Technology of the International Council of Scientific Unions)のTask Group on Geothermodynamic Dataの一員に加えられました。I. L. Khodakovsky(ソ連)を議長とし、米、ソ、仏、日からのメンバーを含むこのグループは、新しい、コンシステントな“International Tables for Geothermodynamics”の作製をめざして、目下その準備段階の作業を進めているところです。

容易に想像できると思いますが、地学熱力学の守備範囲が極めて広いので、このTablesの作製については多くの研究者の様々な形での協力を必要としています。この場を借りて、その御協力をお願いしたいと思います。

これまですでに地学熱力学的データ(GTD)の生産(実測および理論的推定)に、あるいは体系作りに努力して来られた方はもとより、それらに関心のある方、今までに何かの反応についてGTDを必要とし、文献値を集め、比較検討されたことのある方、あるいは、必要なGTDが未だ得られていないために残念な思いをされたことのある方など、御連絡下さい。

「近頃の日本の地球化学者はなぜ熱力学に貢献しないのか」という声がわが国の(他の分野の)研究者の中にあるとのこと。確かにこれは、考えてみるべき問題のひとつではないでしょうか。



21世紀の学術とその動向調査

昭和62年 2 月 日本学術会議広報委員会

日本学術会議は、昨年 9 月 27 日(土)、初めて日本学術会議主催公開講演会を開催しました。
今回の「日本学術会議だより」では、公開講演会「21世紀の学術」の講演内容と日本学術会議の国際交流事業の一つである二国間学術交流及び来年度に開催される共同主催国際会議についてお知らせします。

また、昨年10月、第101回総会で設置された「地域の研究推進特別委員会」等について内容を紹介いたします。

公開講演会「21世紀の学術」

本会議は、学術の成果を国民に還元するという日本学術会議法の趣旨に沿うための活動の一環として、9月27日、本会議講堂において、公開講演会「21世紀の学術」を開催した。

これは、第13期日本学術会議主催の初めての公開講演会であったが、各界各層及び一般市民から350人以上が聴講し、成功裡のうちに終了した。

講演は、3人の演者の講演とそれに関連する質疑応答が行われた。

まず最初に、近藤次郎日本学術会議会長が「これからの科学の望ましいあり方」について、1855年王立研究所のファラデーの講演を示しながら、学術会議の講演会の意義を述べるとともに、21世紀の中期に焦点をあてて明暗の予測として、人口増加、CO₂の増加、森林喪失、砂漠化、核戦争の影響、核の冬の問題等について、スライドを交えながら意見を述べられた。そして、最後に科学技術の進歩が新たな職業を労働者に提供するとともに、多くの失敗も相次いで起こっており、そこで科学を望ましい方向に向けることの重要性を力説した。

次に、本明寛日本学術会議第1部長（早稲田大学教授）が「創造性豊かな人材の育成」について、若者の創造性をいかにして養成するかは、指導する側の態度・助言及び自己主張を表現できるムード・環境作りが重要であるとともに、若者の個性を伸ばすためには「見る・聴く」の教育から「聴く・話させる」の教育へ移行させる必要性が述べられ、21世紀に向けて、今、若者をいかにして「教える」かではなく、「育てる」かが重大であると力説した。

最後に、西川哲治日本学術会議第4部会員（高エネルギー物理学研究所長）が「学術研究における国際性」について、演者の専門分野である物理学特に原子核物理学の分野を中心に演者の体験を踏まえて、高エネルギー物理学のみならず基礎科学の研究には国際協力が不可欠であり、国と国とが独自の個体となって対等なぶつかり合うことが重要であると述べられた。そして、現在、日本では言葉のかべが問題であるが、来訪者に対して特別扱いせず、発展途上国からの研究者に対しても温かく見守るだけでなく、自分でやれるように仕向けることが必要であると力説した。

（なお、この講演会の講演内容は、日学双書第2刊として、財団法人学術協力財団から出版されます。1月末日発行予定）
このような日本学術会議主催の公開講演会は、今後各年度2～3回を目標に開催していくこととしております。

二国間学術交流

本会議は、我が国が科学や技術面において諸外国と交流を深め、それにより我が国の科学技術の総合的な発展に寄与することを目的として、昭和58年度から毎年2か国を選んで代表団を派遣している。58年度にはアメリカ合衆国、マレーシア、59年度にはドイツ連邦共和国、インドネシア共和国、60年度にはスウェーデン王国、タイ王国、そして今年度は11月15日から24日までフランス共和国へ、また、12月8日から14日まで大韓民国へ会長、副会長以下7名ずつの会員を派遣した。

日本学術会議の第13期は、その活動計画にあるとおり、「学術研究の国際性重視と国際的視野の確立」をその活動の重要な柱の一つとしている。今回もその観点に立って訪問国諸機関との間で熱心な協議が行われた。

今回の代表団は、派遣国において科学技術政策や教育を担当する行政機関、研究所、大学等を訪問し、情報交換を行い、さらに訪問先の関係者と両国の学術研究とその問題点について討論を行った。

フランスでは、特に教育の問題について関心が高く、この問題について各地で関係者から種々の意見を聞くとともに情報の交換を行った。さらに近藤会長がコレージュ・ド・フランス及び国立科学研究センターで「日本の最近の科学・技術政策について」講演を行ったが、これに対し、最近のフランスの我が国科学技術政策への関心の高まりを反映し、熱心な意見交換が行われた。

韓国では、最近の産業の発展と科学技術の役割の観点から日本学術会議の役割と活動を含め、我が国の学術体制への質問が多く出されるとともに学術研究の面における協力要請が各訪問先で出され、我が国に対する期待が高いことを深く痛感した。

今回の成果は、代表団の訪問時だけのものでなく、今後の相手国との継続的な科学者の交流、情報、資料の緊密な交換、日本学術会議と相手国機関と相互理解の促進、関係緊密化等の形で永続的に表れるものであり、加えて、これらの成果は、我が国の学術研究の国際交流・協力の基本姿勢及びその抜本的充実方策を検討する場合の大きな資料として役立つものと期待される。

昭和62年度共同主催国際会議

我が国の多数の科学者が世界各国を代表する関係科学者と接し、最近の研究情報を交換し、我が国の科学の向上発達を図り、行政、産業及び国民生活に科学を反映浸透させることを目的として、昭和28年以降毎年おおむね4件の学術関係国際会議を学・協会と共同主催している。近年、国内外において日本開催の要請が強く、また、日本開催国際会議は高い評価を得ている。昭和62年度は次の4国際会議を開催する。

第6回ケムローン世界会議

開催期日 昭和62年 5月17日～22日
開催場所 東京都（都市センターホール）
参加者数 国外 300人、国内 600人、計 900人
[36か国]

共催団体 ㈲日本化学会

※ この会議は、産業、経済の発展と密接な関係を持つ材料問題と材料、宇宙開発の将来計画と材料、未来のコンピュータと材料等について研究発表と討論を行い、材料工学の発展を図ることを目的としている。

第18回低温物理学国際会議

開催期日 昭和62年 8月19日～26日
開催場所 京都市（国立京都国際会館）
参加者数 国外 600人、国内 750人、計 1350人
[38か国]

共催団体 ㈲日本物理学会、㈲応用物理学会

※ この会議は、量子液体、量子固体、超伝導、固体の低温物性、低温技術及び応用等を主要題目とし、研究発表と討論を行い、低温物理学の発展を図ることを目的としている。

法哲学・社会哲学国際学会連合第13回世界会議

開催期日 昭和62年 8月20日～26日
開催場所 神戸市（神戸国際会議場）
参加者数 国外 150人、国内 300人、計 450人
[22か国]

共催団体 日本法哲学会

※ この会議は、法、文化、科学技術—異文化間の相互理解を主要題目とし、科学技術の時代における法と倫理、現代法哲学・現代法社会哲学の基本問題、東西法文化の比較について研究発表と討論を行い、法哲学・社会哲学の発展を図ることを目的としている。

第6回国際会計教育会議

開催期日 昭和62年10月 7日～10日
開催場所 京都市（国立京都国際会館）
参加者数 国外 250人、国内 400人、計 650人
[56か国]

共催団体 日本会計研究学会、日本経済学会連合

※ この会議は、国際理解のための会計教育、会計研究を主要題目とし、研究発表と討論を行い、会計研究の発展を図ることを目的としている。

地域の研究推進特別委員会

日本学術会議は、昨年10月の第101回総会において、「臨時（特別）委員会の設置について（申し合せ）」の一部を改正し、新たに「地域の研究推進特別委員会」を設置することとした。

【目的】

基礎的研究を十分に発展させるためには、研究基盤が広く整備され、各地で特色をもった研究が行われて、研究者

の交流、人事の流動なども活発に行われることが必要である。

地域における学術の振興のための学術体制については、その必要性に応じていろいろな方策が考えられているが、当面、地域に個々の大学、研究機関及び産業界の研究者等に広く開かれた共同利用の総合的、学際的研究機関を設置するのが最も实际的で、かつ有効な方策であろうと思われる。このような研究機関は、地域の研究に関する中枢的機能も果たすべきである。

学術研究動向に関するアンケート調査 についてのお願い

日本学術会議第3常置委員会では、第13期における活動の一環として学術研究動向の現状分析とその展望を行い、今後の学術研究の発展に寄与するために「学術研究動向に関する白書（仮称）」の作成を主要目標としています。

この白書作成については、第99回総会（昭和60年10月）で決定した第13期活動計画において「学術研究の動向について総合的分析を加え、その長期的な研究計画を総合的レビューのためのいわゆる『学術白書』の作成の可能性を検討する」と述べられており、次の第100回総会（昭和61年4月）において、この白書を作成することが了解されました。これらの総会の決定に基づき、白書の具体的内容、作成手続等について検討を重ねてきた第3常置委員会では、白書作成のための資料を得る目的で、本会議の全会員・研究連絡委員会委員および学術研究団体等に対する学術研究動向に関するアンケート調査を実施することになりました。

今回作成予定の白書は、人文・社会及び自然科学の全学問分野の現状分析と動向の的確な把握、問題点の解明等を行うことを目指していますが、これらのことを適切に行うためには、全会員の英知の結集等が不可欠なことは言うまでもありませんが、更にそれに加えて、現に日本学術会議の存在の基盤を成している全学問領域にわたる約830の学術研究団体及び各専門の学問領域や研究課題ごとに設置された180の研究連絡委員会（委員数2370人）の御協力、御支援が是非とも必要であると考えております。

以上のことを踏まえて、アンケート調査の具体的な手順としては、現在、全会員・研究連絡委員会委員にアンケート調査票を発送済みであり、昭和62年2月28日を締切期日として回答願うこととしております。

また、学術研究団体等に対するアンケート調査は、3月上旬に依頼することにし、回答締切は4月末を予定しております。

白書の内容は、各団体等の研究計画等を考える上で種々活用していただけることと思いますので、アンケート調査票がお手許に届きました学術研究団体等におかれましては、年度末の御多用の折、御面倒をおかけしますが、御協力のほどよろしくお願いいたします。

多数の学・協会の御協力により、「日本学術会議だより」に掲載していただくことができ、ありがとうございます。
なお、御意見・お問い合わせ等がありましたら下記までお寄せください。
〒106 港区六本木7-22-34
日本学術会議広報委員会
（日本学術会議事務局庶務課）
電話 03 (403) 6291

○1987年地球化学研究協会学術賞「三宅賞」の受賞候補者および研究助成受領候補者の推薦依頼
下記の推薦依頼がありました。

三宅賞

- (1) 本賞は地球化学に顕著な研究業績をおさめた科学者に贈呈します。
- (2) 本賞は賞状とし、副賞として賞牌および賞金(30万円)をそえます。
- (3) 所定の用紙に受賞候補者の推薦対象となる研究題目、推薦理由(400字程度)、主な論文10編程度に略歴をそえて、協会事務所までお送り下さい。

研究助成

- (1) 研究助成は地球化学の若手研究者で、海外のシンポジウム等に出席し論文を発表する者に対して、行われます。
- (2) 助成金は1件10万円とし、年に3件とします。
- (3) 所定の用紙に研究助成受領の推薦対象者となる若手研究者(各々切日において満40才までとする)の略歴、研究業績、助成金使用の目的、出席予定の国際会議名(開催年月日、開催場所)、発表予定論文題目、推薦理由等を記入して、協会事務所までお送り下さい。

申込メ切 三宅賞:1987年9月5日(土)、研究助成第1回メ切1987年9月5日(土)、第2回メ切1988年1月末日。 申込先 地球化学研究協会 〒166 東京都杉並区高円寺北4-29-2-217、電話03-330-2455。

○V. M. Goldschmidt Conference 開催のお知らせ

日時 1988年5月11日(水)~13日(金)
場所 米国メリーランド州ボルチモア
主催 Geochemical Society (米国)
共催 European Association of Geochemists, IAGC, Mineralogical Society of America

本会議は、V. M. Goldschmidt 生誕100年を記念して、地球および惑星の科学の化学的問題について討論するものです。会議は、一般講演、招待講演、およびシンポジウムで構成されます。

講演要旨メ切(一般講演) 1987年12月18日

講演要旨用紙は下記に請求して下さい。

Goldschmidt Conference Coordinator
The Pennsylvania State University
410 Keller Building
University Park, PA 16802 U. S. A.

なお、シンポジウムとして下記のテーマが計画されています。参加希望者はそれぞれのオーガナイザーに

ご連絡下さい。

- 1) Eleventh Symposium of Geochemical Cycles. C. B. Gregor, Wright State University, Dayton, Ohio 45435
- 2) Paleooceanography. G. W. Brass, RSMAS, University of Miami, 4600 Rickenbacher Causeway, Miami, Florida 33149
- 3) Evolution of Planetary Atmospheres. J. C. G. Walker, University of Michigan, Ann Arbor, Michigan 48109
- 4) Ore-forming Processes. M. T. Einaudi, Stanford University, Stanford, California 94305
- 5) Geochemistry of Cosmogenic Isotopes Determined by Accelerator Mass Spectrometry. L. Brown, Carnegie Institution of Washington, Washington, D. C. 20015
- 6) Environmental Geochemistry. J. O. Nriagu, National Water Research Institute, P. O. Box 5050, Burlington, Ontario L7R 4A6, Canada
- 7) Organic Geochemistry in Hydrocarbon Exploration. R. P. Philip, University of Oklahoma, Norman, Oklahoma 73019
- 8) Origin and Diagenesis of Humic Substances, Coal and Kerogen. P. G. Hatcher, MS923, U. S. Geological Survey, Reston, Virginia 22092
- 9) Modern Concepts in Crystal Chemistry. G. V. Gibbs, Virginia Polytechnic Institute and State University, Blacksburg, Virginia 24601
- 10) Mantle Petrology and Mineralogy. D. H. Eggler, Pennsylvania State University, University Park, Pennsylvania 16802

(注) 本会議は、1988年5月15日~20日、同じくボルチモアで開かれる AGU の春季大会の直前に計画されています。なお、本会議の方は、ボルチモア市中心部から北へ25kmの郊外にある Hunt Valley Inn で開かれます。

○第2回 ESR 年代測定研究発表会の開催

日時 昭和62年6月11日(木)10時から17時
場所 野口英世記念会館(東京・新宿)
主催 ESR 応用計測研究会(実行委員会)
日本地球化学会は協賛学会のひとつです。
参加費 2,000円(予稿集代金を含む)

○第22回 Chemical Abstracts 利用法講習会

主催 化学情報協会
Chemical Abstracts の効率的な使い方を実例を挙げながら説明いたします。

日時 昭和62年6月11日(木)10時から16時

場所 学士会館東大分館(東京都文京区本郷7-3-1)
受講料(テキスト代含む) 一般21,000円。大学教職員・学生・化学情報協会賛助会員・維持会員(1名まで)6,500円。化学情報協会正会員の学協会会員14,000円
定員 20名
申込先 化学情報協会講習会係(Tel. 03-816-3462)

1986年度第3回日本地球化学会評議員会議事録

日時:1986年10月10日(金) 18時00分~20時35分
場所:富山県民会館601号室(富山市)
出席者:増田彰正会長、一國雅巳副会長、相川嘉正、秋山雅彦、石渡良志、梶原良道、金森 悟、兼岡一郎、川辺岩夫、木越邦彦、佐藤和郎、清水 洋、杉崎隆一、坪田博行、中井信之、中山英一郎、野崎義行、松葉谷治、松久幸敬、水谷義彦、綿拔邦彦 各評議員、鳥居鉄也監事

I. 会議にさきだち以下のことを承認した。

1. 1987年度年会実行委員長である相川嘉正氏(東邦大学医学部)に、役員選出細則6-3により、評議員を委嘱する件を承認した。
2. 前回(第2回評議員会)の議事録を承認した。

II. 報告事項

1. 幹事会(清水評議員)
*第3回(9月6日)および第4回(10月2日)幹事会を東京大学理学部化学教室で行なった。
*庶務担当の大隅評議員がカメルーンへ出張で不在となるため、第3回評議員会および総会における庶務関係の報告ならびに事業計画説明を清水評議員が代行する。
2. 庶務(清水評議員)
*日本学会事務センターと1987年度の契約をした。契約内容は従来通りであるが、来年度から会員ファイルの漢字化を実施する。
3. 会計(清水評議員)
*総会報告・提案事項の審議の際に報告する。
4. 編集(一國副会長)
*G. J. Vol. 20はNo. 2まで発行した。原稿はNo. 5まで揃っている。本年度の投稿数は現時点まで32編で、減少傾向にある。

*G. J. Vol. 20が完成した段階でIndex(別冊)を発行する。
(石渡評議員)
*『地球化学』第20巻1号を11月に発行の予定。同2号は年会課題講演を中心に編集し、1月に発行の予定。
*編集体制を整えるため、新たに5名の方に編集委員を依頼した。
(松久評議員)

*ニュース108号(年会プログラム号)を9月に発行した。

5. 行事

(水谷評議員)
*本年度年会の講演数は229件、参加登録数は350名以上である。
*エクスカッション(立山登山)は定員に満たず、中止となった。
(野崎評議員)
*来年度年会は東邦大学医学部でお世話いただくことになった。

*来年度の春季シンポジウムの原案を作成した。副題は「地球化学の最近の話題」とし、1987年4月6日(月)、東大教養学部で開催し、シンポジウム終了後懇親会を開く。コンビナーは増田・一國・綿拔・野崎の4氏とする。

6. その他

* (木越評議員) 本年6-7月、Cambridge(英国)で開かれた地質年代学・宇宙年代学・同位体地学国際会議の際、IAGC Council Meeting が開かれた。
* (木越評議員) Global Change in the Geosphere—Biosphere Program がアメリカで計画されている。国際的規模の共同研究が必要なので、日本学術会議を通じて主旨説明があった。本会でもご検討いただきたい。
* (一國副会長) 本会より選出された陸水学研連委員、小倉紀雄氏より、研連委員が評議員でない場合、本会との連絡をどのようにとったらよいか検討していただきたい旨、申し出があった。
* (増田会長) 本会会員の坪井誠太郎氏が9月22日に逝去された(享年93才)。葬儀および告別式は10月16日午後1時から青山斎場で行われる。心から哀悼の意を表し、会長名で弔電を打つ予定である。

III. 議事

1. 入退会(清水評議員)
* 入会(15名):正会員 Mauro Fujii・Jerome Johemko・青木正博・風早康平・久保紀重・先原一也・佐藤長治・島岡太郎・中口 譲・畑中良夫・福永

715-314

一哉・藤原敏記・村石治人・坂本尚義
および賛助会員：神戸学院大学付属図書館
*退会（1名）：正会員 松井 宏
以上を承認。会員現況は以下のとおり。

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1986年4月30日	872	12	7	891
入 会	14	1	0	15
退 会	1	0	0	1
1986年8月31日	885	13	7	905

2. 学会賞設定について

*増田会長より「日本地球化学会授賞規程」（案）の提案および補足説明があった。柴田賞については、名前を使わせていただくことについて柴田家の御了解を得た。

*柴田賞の対象範囲、柴田賞と日本地球化学会賞の境の引き方、日本地球化学会賞と応用・環境地球化学賞の性格の違い、GJ論文賞の設置の可能性、授賞の頻度、副賞の有無について質問があった。これらに対し会長および副会長から説明のあったのち、会長から、各問題については細則および運用面で配慮したい旨発言があった。

*日本地球化学会功労賞の対象について、地球化学全般とするのか、本会への寄与を重視するのか議論があった。

*応用・環境地球化学賞の設置の是非について多くの議論があり、○ことさら同賞を設けるのはかえってマイナスであり、日本地球化学会賞と一本にした方がよいのではないか、○同賞の対象から本会会員のわくをはずせば同賞の意味が出てくるのではないかと、○本会として応用・環境化学の分野を重視するのであれば、その姿勢を示すため、分けた方がよい、等の意見が出された。

*会長からの提案で、日本地球化学会賞の対象として応用・環境地球化学の分野にも充分配慮し、同分野の発展に留意することを確認した。

*これを受けて会長から以下の修正を含む授賞規程案が再度提出され、これを承認した。

1) 第一条および第四条の応用・環境地球化学賞に関する部分を削除する。

2) 第六条の日本地球化学会功労賞の授賞者を、「わが国の地球化学あるいは本会の発展に関し特に寄与のあった者」とする。

3. 来年度行事計画について

*前回の評議員会での合意を受け、例会2回の代わりに春季シンポジウムを来年度行事計画として総会に提

案することを再確認した。

4. 総会提案事項について

*清水評議員より議事次第の説明があり、これを了承した。

*1985年度事業および決算報告について清水評議員より説明があり、これを了承した。1985年度は会費および広告料の増収があった。

*1986年度事業および会計中間報告について清水評議員より説明があり、これを了承した。

*日本地球化学会授賞規程案を会長から提案することを了承した。

*1986年度事業計画について清水評議員より説明があり、これを了承した。

*1986年度予算案について清水評議員より説明があり、GJ 海外販売価格はドル立てのため、円高分をそのままスライドさせると50%の値上げとなるため、これを+20%におさえることとする幹事会案を了承した。GJ Index 出版費用を出版費に上乘せし、その分次年度繰越金をさし引く修正案が出されてこれを了承した。

5. その他

*（綿抜評議員）会誌の配布、年会招待、講演要旨集配布等における名誉会員への対応を確認し、ルール化していただきたい。

編集者 松久幸敬
〒305 茨城県筑波郡谷田部町東1-1-3
地質調査所 鉦床部
電話 0298 (54) 3636
発行所 日本地球化学会
〒113 東京都文京区弥生2-4-16
学会センタービル（4F）
日本学会事務センター内
電話 東京03 (317) 5801
振込先銀行 三井銀行上野広小路支店
普通預金 口座番号 920-833

日本地球化学会ニュース

No. 111

1987. IX. 21

1987 年度 日本地球化学会年会

主催 日本地球化学会 共催 日本化学会

日 時 11月5日（木）～7日（土）

会 場 東邦大学医学部（東京都大田区大森西5-21-16）

年会準備委員会 東邦大学医学部 相川嘉正

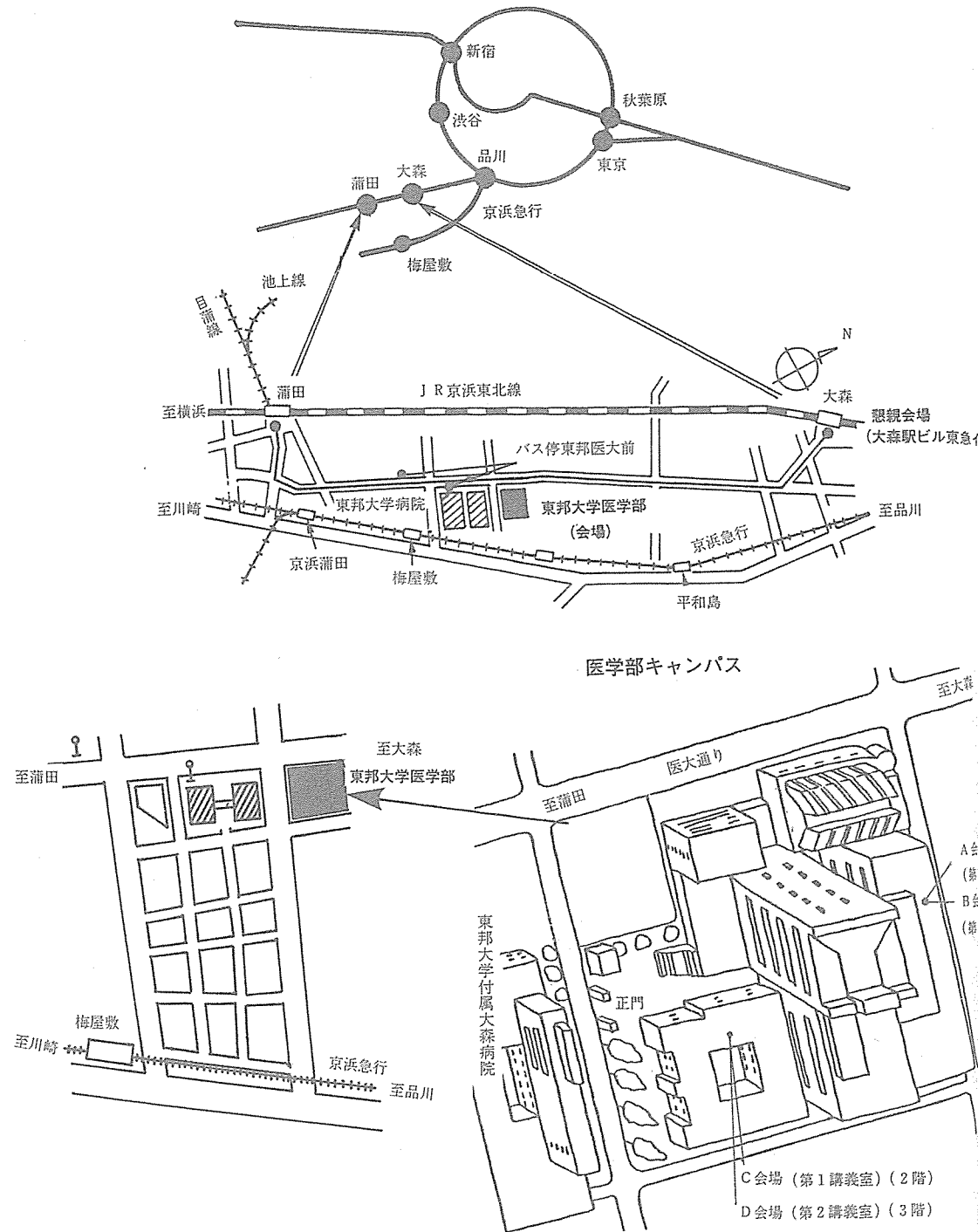
電話03 (762) 4151 内線 (2551, 2555)

	会場	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
5日 (木)	A	受 付	一 般 講 演 (海 洋)			一 般 講 演 (海 洋)					
	B		一 般 講 演 (環境同位体)			一 般 講 演 (環境同位体)					
	C		一 般 講 演 (有機物)			一 般 講 演 (有機物・降水)					
	D		一 般 講 演 (岩石年代)			一 般 講 演 (堆積物)					
6日 (金)	A	課 題 講 演 (最近の伊豆半島)			課 題 講 演 (最近の伊豆半島)			総 会		懇 親 会	
	B	課 題 講 演 (東京湾・河川)			課 題 講 演 (東京湾・河川)						
	C	課 題 講 演 (地球化学と医学)			課 題 講 演 (地球化学と医学)		一般講演 (環境・生物)				
	D	一 般 講 演 (岩石・地殻)			一 般 講 演 (岩石・地殻)						
7日 (土)	A	一 般 講 演 (大 気)			一 般 講 演 (大 気)						
	B	一 般 講 演 (温泉熱水・岩石-水反応)			一 般 講 演 (火山ガス・地震・炭酸塩)						
	C	一 般 講 演 (陸 水)			一 般 講 演 (陸水・希ガス)						
	D	一 般 講 演 (地球外物質)			一 般 講 演 (地球外物質)						

講演時間：一般講演は討論を含めて15分、課題講演は討論を含めて25分。

懇 親 会：11月6日（金）18時より大森東急イン飛鳥の間にて行なう。会費4000円（学生3000円）

年会会場案内図



注意：大学には外来者のための駐車場はありません。

- (a) 場所 東邦大学医学部 東京都大田区大森西5丁目21番16号 電話03-762-4151 (内線) 2551, 2555
 (b) 交通 ○JR 大森駅下車、東口バス乗場①蒲田駅行に乗りし、東邦医大前下車 (大森駅から約15分)
 ○JR 蒲田駅下車、東口バス乗場⑤大森駅行に乗りし、東邦医大前下車 (蒲田駅から約10分)
 ○京浜急行梅屋敷駅下車、徒歩7分 (各停しか止まりません)

第1日 11月5日 (木)

A会場

一般講演 (9:30~10:30) 座長 鹿園直建

- 1 A 01 沖縄トラフの海底熱水活動 (1) 溶存化学成分の濃度異常 (東大海洋研・東大理・国立公害研・広島大総合科) ○石橋純一郎・蒲生俊敬・酒井 均・中井俊介・五十嵐丈二・小嶋稔・野尻幸宏・坪田博行
 1 A 02 沖縄トラフの海底熱水活動 (2) 熱水性堆積物の特徴 (東大海洋研・琉球大理) ○益田晴恵・石橋純一郎・加藤祐三・蒲生俊敬・酒井均
 1 A 03 沖縄トラフの海底熱水活動 (3) 「しんかい2000」による観測 (東大海洋研・海洋科学技術セ) ○蒲生俊敬・酒井 均・堀田 宏
 1 A 04 北フィジー海盆における海底熱水活動の探査 (東大海洋研・HIG ハワイ大・東大理) ○蒲生俊敬・P. Sedwick・G. McMurtry・酒井 均・五十嵐丈二・小嶋 稔
 (10:40~11:55) 座長 坪田博行
 1 A 05 海底熱水性マンガン鉱物の化学組成と脱水安定性 (地調) ○臼井 朗・湯浅真人・野原昌人
 1 A 06 日本海産マンガンクラストの化学組成 (群馬大教・群馬大工・東大海洋研) ○海老原充・三浦 勉・赤岩英夫・堀江絹子・児玉幸雄・酒井 均
 1 A 07 陸棚斜面からの²²⁷Acと²²⁸Raの海水への放出 (東大海洋研) ○野崎義行・H. S. Yang
 1 A 08 北太平洋西部海域の海水中のCs-134, Cs-137濃度 (気象研) 青山道夫・○廣瀬勝己・鷲 猛・杉村行勇
 1 A 09 フィリピン海盆におけるトリウム同位体の分布 (北大水産) ○田口和典・渡辺 豊・角皆静男
 (13:00~14:15) 座長 杉村行勇
 1 A 10 海洋における粒子態物質の水平輸送について (北大水産) 角皆静男
 1 A 11 海水中の希土類元素の挙動に関する考察 (東大理) ○田中美穂・清水 洋・増田彰正
 1 A 12 海水中のNd, Ceの同位体比に関する研究 (東大理・東大海洋研・日本分析セ) ○田中美穂・清水 洋・野崎義行・池内嘉宏・増田彰正
 1 A 13 東シナ海におけるWとMoの分布 (京大化研・京大理) ○宗林由樹・木原杜林・松井正和・中山英一郎

1 A 14 日本海溝における重金属の分布 (広島大総合科・室蘭工大) ○下島公紀・坪田博行・室住正世・中村精次
 (14:25~15:40) 座長 松本源喜

- 1 A 15 海水中のハロカーボン類の実用的測定法とその応用 (北大水産) 渡辺修一・○斎藤子明・角皆静男
 1 A 16 北太平洋西部海水中のDOCとDONの分布—その1 (気象研) 鈴木 款・○杉村行勇
 1 A 17 北太平洋西部海水中のDOCとDONの分布—その2 (気象研) 鈴木 款・○杉村行勇
 1 A 18 海水中のDOMの分子量別のC/N比 (気象研) ○鈴木 款・杉村行勇
 1 A 19 海洋におけるセレンの循環の再計算 (気象研) ○鈴木 款・杉村行勇
 (15:50~17:20) 座長 蒲生俊敬
 1 A 20 有明海の海水および底泥間隙水の季節的、地域的な水質の変化 (佐賀大理工・佐賀短大) ○飯盛喜代春・飯盛和代・山口弘俊・橋本博文
 1 A 21 海水中の栄養塩の鉛直分布から予想されるリン、窒素、ケイ素の摂取速度の比較 (北大水産) ○渡辺修一・角皆静男
 1 A 22 海水中の溶存総ケイ酸の定量と有機形ケイ素の存在の可能性について (高知女大家政・京大化研・京大理) ○一色健司・宗林由樹・中山英一郎
 1 A 23 海水中のケイ素について (地球化学研・気象研) 三宅泰雄・猿橋勝子・○鷲 猛・金沢照子
 1 A 24 電解濃縮—化学発光法による海水中のMnの自動分析法 (京大理・高知女大家政・京都工繊大) ○中山英一郎・宗林由樹・一色健司・柄谷 肇
 1 A 25 表面海水中の二酸化炭素分圧の時間変動について (気象研) ○井上久幸・杉村行勇

B会場

- 一般講演 (9:30~10:45) 座長 松葉谷 治
 1 B 01 地下水中のトリチウム起源³He (山形大理・富山大理) ○高岡宣雄・水谷義彦
 1 B 02 環境同位体から見た南極東クイーンモードランド地域内陸部の氷床堆積環境 (富山大理) ○佐竹 洋・川田邦夫・津島 健・佐藤暢子
 1 B 03 最終氷期における大陸氷床水の $\delta^{18}O$ の推定 (名大水圏研) 加藤喜久雄
 1 B 04 富山県常願寺川扇状地における降水の地下水

- への寄与(富山大理) 桜井和浩・○水谷義彦
- 1 B 05 講演中止
(10:55~11:55) 座長 松久幸敬
- 1 B 06 梅雨期の降水の同位体組成の変動(名大理・名大水圏研) ○加藤俊典・中井信之・武田喬男
- 1 B 07 同位体比及びCl濃度を多重標識とした河川へ流出する地下水の識別(秋田大鉱山・放医研) ○松葉谷 治・宮本霧子
- 1 B 08 塩化ナトリウム水溶液における水素同位体分別の温度依存性(学習院大理) 垣内正久
- 1 B 09 沸石の酸素同位体比の測定法(岡山大地球セ) ○能登征美・日下部 実
(13:00~14:00) 座長 日下部 実
- 1 B 10 水/ガス同位体交換法による同一試料水の δD , $\delta^{18}O$ 分析(三菱金属中央研・東工大理) ○上田 晃・高鳥薫朗・堀田十輔
- 1 B 11 八甲田地域火砕岩斜長石中のガラス包有物のD/H比(三菱金属中央研・地調) ○上田 晃・村岡洋文・高鳥薫朗
- 1 B 12 流体包有物中の水の $\delta^{18}O$ と石英の冷却速度の関係(東工大理・地調) ○大場 武・風早康平
- 1 B 13 恐山熱水系における熱水活動と鉱化作用(地調) ○青木正博・松久幸敬
(14:10~15:25) 座長 中井信之
- 1 B 14 二、三のマントル鉱物中の CO_2 及びグラファイト質炭素(東工大理) ○永倉直人・松尾禎士
- 1 B 15 炭素同位体比からみた日本の主要天然ガスの成因(地調) ○猪狩俊一郎・坂田 将
- 1 B 16 哺乳動物の骨の磷酸塩酸素同位体比一特に鯨類の骨と海水の酸素同位体比の相関について(富山大理・富山市科学文化セ・国立科学博) ○吉田尚弘・谷内佳苗・川村成人・後藤道治・宮崎信之
- 1 B 17 縄文人骨の炭素・窒素同位体組成について(三菱化成生命研・東大総研資) ○南川雅男・赤澤 威
- 1 B 18 生体内アミノ酸の $^{13}C/^{12}C$, $^{15}N/^{14}N$ 同位体比の特徴(三菱化成生命研) ○南川雅男・柄沢亨子
(15:35~16:50) 座長 北 逸郎
- 1 B 19 南極における人工放射性核種濃度とその分布(日本分析セ・金沢大 LLRL) ○森本隆夫・池内嘉宏・橋本丈夫・吉清水克己・小林和久・鳥居鉄也

- 1 B 20 堆積物コアの ^{13}C , ^{14}C , C/N比からみた完新世海進期の気候変動(名大理・名大アイソトープセ) ○中井信之・大石昭二・栗山豊子・中村俊夫
- 1 B 21 1968—1969年における太平洋海水中の放射性炭素濃度分布(名大アイソトープセ・名大理・広大総科) ○中村俊夫・中井信之・小野田伸一・坪田博行
- 1 B 22 チェルノブイリ原発事故に汚染された牧草から牛乳への ^{131}I 及び ^{137}Cs の移行(北海道立衛生研) ○福田一義・奥井登代・小林 智
- 1 B 23 噴火湾水中のRn-222の変動(北大水産)原田晃・○川端一史・角皆静男

C会場

- 一般講演 (9:30~10:30) 座長 福島和夫
- 1 C 01 琵琶湖有光層における生産物組成について(名大水圏研・琵琶湖研) ○濱 健夫・松永捷司・半田暢彦・高橋幹夫
- 1 C 02 琵琶湖における栄養塩類の回帰と酸素消費Ⅱ(名大水圏研・琵琶湖研) ○松永捷司・半田暢彦・濱 健夫・高橋幹夫
- 1 C 03 印旛沼水系の新川における溶解性有機物の組成(千葉大工・埼玉大工) ○立本英機・君島克憲・藤代光雄
- 1 C 04 南極湖沼の有機物の特徴(東大教養・千葉工大) ○松本源喜・綿拔邦彦・鳥居鉄也
(10:40~11:55) 座長 寺島美南子
- 1 C 05 内湾植物プランクトンによる物質生産の日変化(名大水圏研) ○濱 順子・半田暢彦
- 1 C 06 大阪湾における各種粒状有機物の特性(香川大農) 門谷 茂・○三島康史
- 1 C 07 バイオマーカー組成からみた東北日本の原油・コンデンセートの熟成度(地調・島根大理) ○坂田 将・鈴木德行・金子信行
- 1 C 08 溶存タンパク様物質の分子量分布とそのアミノ酸組成(北大水産) ○多田邦尚・米田義昭
- 1 C 09 南極沿岸域における粒子の鉛直フラックスの特性(名大水圏研・極地研) ○半田暢彦・福地光男
(13:00~14:00) 座長 半田暢彦
- 1 C 10 中小河川底質中の多環芳香族炭化水素の分布(新潟県衛公害研) ○川田邦明・横山ひろみ・森山 登
- 1 C 11 琵琶湖1400m コア中の炭水化物の深度分布。加熱実験との対比(都立大理) ○鶴崎 実・

- 菅原 智・石渡良志
- 1 C 12 現世堆積物中におけるNon-solvent Extractable 脂質の起源及び地球化学的特性—各種土壌試料を対象に—(愛知学院大教養) 西村弥重
- 1 C 13 湖底堆積物および湖底直上水中における脱窒機構, 室内実験を中心に(愛知学院大教養) 小山忠四郎
(14:10~15:40) 座長 西村弥重
- 1 C 14 新庄盆地新第三紀の堆積岩から検出されたモノカルボン酸(筑波大) ○古宮正利・下山晃・原田 馨
- 1 C 15 新庄盆地新第三紀の堆積岩から検出された核酸塩基(筑波大) ○萩下 撰・下山 晃・原田 馨
- 1 C 16 堆積岩中の非タンパク質構成アミノ酸について(地調) 寺島美南子
- 1 C 17 化学進化における宇宙線の役割—陽子線照射による模擬原始惑星大気からのアミノ酸の合成(東工大理・三菱化成生命研) ○小林憲正・大島泰郎・柳川弘志
- 1 C 18 海底熱水噴出孔と生命の起源—模擬実験によるアミノ酸の合成(東工大理・三菱化成生命研・化技研) 小林憲正・○柳川弘志・土器屋正之・大島泰郎
- 1 C 19 In-situ 高温 ESR によるケロジェンの熟成度評価(北大工・北大理) M.Bakr・真田雄三・○秋山雅彦
(15:50~17:20) 座長 加藤喜久雄
- 1 C 20 物質循環に対する森林の影響(琉球大理) ○渡久山 章・松田浩二・与那覇善榮
- 1 C 21 雨水中のギ酸, 酢酸濃度とそのpHへの寄与(慶大理工) ○丹野善将・安江憲介・田中茂・橋本芳一
- 1 C 22 浦和における雨水のイオン組成(埼玉大工) ○君島克憲・小沢竹二郎
- 1 C 23 雪に含まれた塩の組成—昭和基地, 1985年—(横浜国大教育) 村山治太
- 1 C 24 南極積雪中の化学成分(名大水圏研) 金森悟・○金森暢子・伊佐恵理子・長田和雄
- 1 C 25 雨および植物の雫中のアルミニウムの量(東邦大理) ○大森禎子・吉池雄蔵・岡村忍・岩崎岩次

D会場

- 一般講演 (9:30~10:30) 座長 兼岡一郎
- 1 D 01 金峰火山(熊本)の火山岩中での $^{87}Sr/^{86}Sr$

- 同位体比の挙動(九大理) ○柳 哮・浜本礼子・有川 浩
- 1 D 02 火山岩の $^{87}Sr/^{86}Sr$ 比にもとづくフィリピン海プレート沈み込みの復元(東大理・岡山理大・東大教養) ○野津憲治・長尾敬介・大島治
- 1 D 03 Plio-Pleistocene 火山岩のRb-Sr法による年代測定(九大理) ○中村 真・柳 哮
- 1 D 04 Sm-Nd, Rb-Sr法による飛騨変成岩のスラブ年代(地調・名大理) ○田中 剛・足立守
(10:40~11:55) 座長 野津憲治
- 1 D 05 変成作用をうけた岩石の $^{40}Ar-^{39}Ar$ 年代測定(東大理) 滝上 豊
- 1 D 06 ICP質量分析法によるRe-Os法の開発: 同位体分析精度の向上(東大理) ○平田岳史・清水 洋・増田彰正
- 1 D 07 Re-Os法による硫化鉱物の年代測定(東大理) ○三宅 隆・清水 洋・増田彰正
- 1 D 08 年代学的比較に基づく ^{138}La の壊変定数についての研究(Ⅱ)(東大理) ○中井俊一・清水 洋・牧嶋昭夫・増田彰正
- 1 D 09 海洋底岩石の変質とその放射年代への影響(東大震研) 兼岡一郎
(13:00~14:00) 座長 杉崎隆一
- 1 D 10 ICP発光分析による琵琶湖堆積層の起源に関する地球化学的研究(東大理) ○豊田和弘・原口紘丞
- 1 D 11 太平洋深海底鉄マンガン酸化物の化学組成——沈着環境との対応関係について(東大理) ○豊田和弘・増田彰正
- 1 D 12 深海底堆積物中の局所的還元環境と重金属の濃集(原研) ○中嶋 悟・喜多治之
- 1 D 13 沖縄舟状海盆における柱状堆積物中の金属元素の分布(東海大海洋・東大海洋研) ○豊田恵聖・桂 浩史・塩田芳久・志和尚彦・岡部史郎・児玉幸雄
(14:10~15:25) 座長 豊田和弘
- 1 D 14 有明海における泥質堆積物の硫黄量と主要化学成分の関係(地調) ○粕 武・横田節哉
- 1 D 15 海底熱水活動の影響下にあるサンゴ礁堆積物のウラン, トリウムについて(琉球大理) 大森保
- 1 D 16 美濃帯の熱水性堆積物に関する地球化学的研究(名大理) ○杉谷健一郎・杉崎隆一・足立守

- 1 D 17 堆積物—海水境界面における ^{210}Pb の挙動
(北大水産) ○成田尚史・原田 晃・角皆
静男
- 1 D 18 東シナ海・黄海堆積物の間隙水のウラン (北
大水産) ○長尾誠也・角皆静男
(15:35~16:50) 座長 大森 保
- 1 D 19 ニュージーランド産二疊紀熱水性チャートの
化学組成 (名大理) ○玉井ます美・杉崎隆
一・足立 守
- 1 D 20 フランススカン帯の層状チャートの堆積環境
(神戸大理・名大理) ○山本鋼志・杉崎隆
一・足立 守
- 1 D 21 深海底堆積物のセリウムの負の異常の原因と
しての fish bone debris (東大理) ○豊田
和弘・中村裕二・増田彰正
- 1 D 22 太平洋深海底堆積物の化学組成——堆積環境
との対応関係について (東大理) ○豊田和
弘・中村裕二・増田彰正
- 1 D 23 推古海山の “Co-rich crusts” の化学組成 (東
大理) ○豊田和弘・増田彰正

第2日 11月6日 (金)

A会場

- 課題講演「最近の伊豆半島周辺の地球化学—火山、温
泉、地質—」
コンビナー 綿拔邦彦
(9:00~10:15) 座長 福岡孝昭
- 2 A 01 伊豆の衝突帯付近の地質構造とテクトニクス
(神奈川県立博物館) 今永 勇
- 2 A 02 伊豆半島横断土壌ガス調査結果と同半島の地
熱構造 (地調) ○野田徹郎・阿部喜久男
- 2 A 03 伊豆半島の金鉱床: セレンとテルルを伴う鉱
床の相異点 (東大理・東大資料) ○鹿園直
建・清水正明
(10:25~12:05) 座長 野田徹郎
- 2 A 04 伊豆半島周辺火山の活動と岩石 (東大教養)
大島 治
- 2 A 05 伊豆大島1986年噴火噴出物の岩石化学的特徴
(学習院大理・東大震研・東大理) ○福岡
孝昭・藤井敏嗣・荒牧重雄・金子隆之・小沢
一仁
- 2 A 06 伊豆大島1986年噴火と火山ガス組成 (東工
大・岡山大・埼玉大) ○平林順一・吉田
稔・小坂丈予・小沢竹二郎・日下部 実
- 2 A 07 伊豆大島三原山火口ガス中の H_2 , CO_2 , 及び
 O_2 の遠隔連続観測 (地調・電力中研・東工
大工・岡大地球研セ) ○風早康平・高橋

- 誠・安藤直行・大隅多加志・平林順一・日下
部 実
(13:00~14:15) 座長 吉田 稔
- 2 A 08 1986年伊豆大島火山噴火とヘリウム同位体比
の変動 (東大理) ○佐野有司・中村裕二・
野津憲治・脇田 宏
- 2 A 09 最近17年間における三原山の火山活動とガス
の変化 (都立大・名工大・東邦大医・大島
町) ○野口喜三雄・神谷 宏・相川嘉正・
下村為造
- 2 A 10 伊豆大島で1986—1987年に発生した変色海水
の化学成分 (岡山大理・東工大工・海上保安
庁) ○小坂丈予・松田敏彦・足立紀佳・平林
順一・土出昌一・柴山信行・佐藤寛和
(14:25~15:40) 座長 小沢竹二郎
- 2 A 11 伊豆大島地域の地下水水質 (地調) 高橋政明・
阿部喜久男・野田徹郎・○安藤直行
- 2 A 12 伊豆半島東海岸諸温泉の化学成分の経年変化
(中央温研) 甘露寺泰雄
- 2 A 13 三宅島の温泉の特徴 (東大教養) ○綿拔邦
彦・大沢信二

B会場

- 課題講演「東京湾および東京湾にそそぐ河川の地球化
学」
コンビナー 石渡良志
(9:25~10:40) 座長 松本英二
- 2 B 01 多摩川における微量元素の化学的挙動に関す
る研究 (都立アイソトープ研) ○谷崎良之・
山崎正夫・下川利成
- 2 B 02 多摩川における微量元素の分布 (東大理)
○赤木 右・原口紘丞
- 2 B 03 多摩川 (調布堰) における合成洗剤由来の汚
染物質の挙動 (東京農工大農・都立大理)
○高田秀重・齊藤裕政・石渡良志
(10:50~12:05) 座長 和田英太郎
- 2 B 04 多摩川、荒川河口域と東京湾奥部における微
量金属の分布 (東京水産大) ○前田 勝・
葛西孝司・鎌谷明善
- 2 B 05 多摩川河口及び東京湾奥部における燐と珪素
の挙動について (東京水産大) 鎌谷明善
- 2 B 06 千葉市から東京湾にそそぐ河川水の一測定点
における二三の成分の平均値 (東邦大理)
岩崎岩次
(13:00~14:15) 座長 小倉紀雄
- 2 B 07 東京湾における有機物の堆積、深度分布につ
いて (都立大理・三菱化成生命研) ○石渡

- 良志・久武潤子・鶴崎 実・和田英太郎
- 2 B 08 東京湾におけるスズの収支 (Ⅱ) (気象庁)
大山準一
- 2 B 09 東京湾における物質収支 (名大水圏研) 松本
英二
(14:25~15:40) 座長 石渡良志
- 2 B 10 東京湾における栄養塩類の循環 (東大海洋研)
才野敏郎
- 2 B 11 東京湾における溶存有機物の分子量分布特性
(東京農工大農) ○小川浩史・小倉紀雄
- 2 B 12 東京湾における有機汚濁が生物群集に与える
影響 (東邦大理) 風呂田利夫

C会場

- 課題講演「地球化学と医学の接点」
コンビナー 太田直一
(9:00~10:15) 座長 村松康行
- 2 C 01 マンガンの毒性と脳内カテコールアミン代謝
に関する実験的研究 (東邦大医) ○川田文
夫・伊藤敦子・伊藤順通
- 2 C 02 微量元素分布と病気について (すい臓を中心
として) (都立科技大・都立墨東病院・順天
堂大医) ○寺井 稔・鈴木不二彦・松本道
男
- 2 C 03 疾患と微量元素 (聖マリアンナ医大・立教大
原研・都立科技大) 太田直一・戸村健児・
○寺井 稔・山口 晋・牛込新一郎
(10:25~12:05) 座長 寺井 稔
- 2 C 04 放射性核種及び微量元素の環境から人体への
移行 (放医研) ○村松康行・大桃洋一郎
- 2 C 05 炭素・窒素同位体分布からみた脊柱靱帯骨化
症患者の食品摂取傾向 (東邦大医・三菱化成
生命研) ○武者芳朗・茂手木三男・古府照
男・阪元政郎・南川雅男
- 2 C 06 消毒薬クロルヘキシジンの医療系廃水処理施
設における挙動 (浜松医大) 松島 肇
- 2 C 07 地殻中物質主として珪素化合物の吸入による
健康障害 (東邦大医) 大本美彌子
(13:00~14:15) 座長 太田直一
- 2 C 08 大気汚染物質が呼吸器におよぼす影響 (国立
公害研) 小林隆弘
- 2 C 09 土壌内破傷風菌の分布と密度 (東邦大医)
海老沢 功
- 2 C 10 有機塩素化合物の環境動態とその高等動物へ
の影響 (愛媛大農) 立川 涼
- 一般講演 (14:25~15:10) 座長 吉岡小夜子
- 2 C 11 都市物質系モデルにおける媒体の位置づけ

- (MV 研・青山女短大) ○半谷高久・秋山
紀子
- 2 C 12 日本海動物プランクトンの微量元素組成の規
則性 (名大水圏研・京大原子炉・東大海洋
研) ○増沢敏行・小山陸夫・寺崎 誠
- 2 C 13 琵琶湖産貝類の微量必須元素の取り込みに関
する研究 (近畿大理工) ○中口 譲・青野辰
雄・玉置博通・平木敬三
(15:10~16:55) 座長 平木敬三
- 2 C 14 二枚貝の貝殻及び外套液中の微量元素 (愛知
教育大・都立科技大) ○吉岡小夜子・寺井
稔
- 2 C 15 遠洋及び沿岸に生息する魚類の脊椎骨中の鉛
(青山学院大理工・国立文化財研・東京水産
大) ○原川裕章・木村 幹・浅野正樹・平尾
良光・前田 勝・山川 紘
- 2 C 16 箱根湯ノ花沢温泉の流下に伴う化学成分の
変化と生物の作用 (東邦大医) ○高柳進之輔・
杉森賢司・加藤尚之・塚本邦子・千頭道子・
相川嘉正

D会場

- 一般講演 (9:00~10:00) 座長 清水 洋
- 2 D 01 主要成分の垂直分布からみた陸性マンガング
塊の成長機構 (琉球大理) 平良初男
- 2 D 02 マンガン団塊・マンガングラスト中の白金お
よび金の存在量 (地調) ○寺島 滋・臼井
朗・中尾征三・三田直樹
- 2 D 03 GSI 岩石標準試料「堆積岩シリーズ」JLk-1,
JLs-1, JDo-1 について (地調) ○安藤 厚・
寺島 滋・岡井貴司・井内美郎・五十嵐俊雄
- 2 D 04 地質調査所に設置された放射化分析システム
と標準岩石の分析結果 (地調) ○上岡 晃・
田中 剛
(10:10~10:55) 座長 加々美寛雄
- 2 D 05 火山ガラスの ICP 分析に基づくテフラ層の
同定 (地調) ○吉川清志・今井 登・奥村
晃史・水野清秀
- 2 D 06 ブラジルの CANA BRAVA mafic 及び ultra-
mafic complex の成因: 希土類元素存在度か
らの制約 (神戸大理) ○藤井マウロ安男・
中村 昇・山本鋼志
- 2 D 07 大西洋中央海嶺 (北緯 24° および 30°), 東
太平洋海膨 (ODP Leg III) で採取された
MORB の希土類元素濃度及び Sr, Nd, Ce 同
位体比 (東大理) ○森 光司・清水 洋・
増田彰正

- (11:05~12:05) 座長 安藤 厚
- 2 D 08 リン鉱石中の希土類元素の分布(東邦大理・東大原研セ) ○高田 稔・斎藤信房・高野武美
- 2 D 09 黒鉱中の希土類元素(神奈川県工試・セイコー電子工業・東大理) ○岩崎 廉・内田弘・高橋純一・原口紘丞
- 2 D 10 石炭化度と希土類元素濃度との関係(武蔵工大原研) ○中西幸雄・鈴木章悟・平井昭司
- 2 D 11 ダイヤモンド中の希土類元素の定量法の開発並びにその希土類元素パターンの特徴(東大理) ○赤木 右・増田彰正
- (13:00~14:15) 座長 中村 昇
- 2 D 12 ノ目湯, 海川産 Gabbroic inclusion の Sr-Nd 同位体比(岡山地球セ) ○渡邊久芳・加々美寛雄
- 2 D 13 古第三紀~白亜紀火成岩の Sr・Nd 同位体比からみた西南日本内帯の形成(岡山地球セ・島根大理) ○加々美寛雄・岩田昌寿・佐野 栄・飯泉 滋
- 2 D 14 飛驒変成帯ミグマタイトの地球化学(岡山理大理・山口大理) ○関 達也・加納 隆
- 2 D 15 近畿地方における花崗岩類の地域差(奈良教育大・京大原子炉) ○三辻利一・中野幸広
- 2 D 16 ソロモン諸島(New Georgia Group)の火成岩の Sr および Nd の同位体比ならびに希土パターン(東大理) ○猿渡英之・河田陽介・清水 洋・増田彰正
- (14:25~15:40) 座長 平井昭司
- 2 D 17 グリーンランド Amitsoq 片麻岩の Ce および Nd 同位体比(東大理) ○清水 洋・中井俊一・田崎真司・牧嶋昭夫・増田彰正
- 2 D 18 講演中止
- 2 D 19 希土類元素とその同位体組成から見たオクロ天然原子炉の生成および作動の条件(東大理・日本燃料技術開発) ○日高 洋・菱田俊一・藤井 勲・増田彰正
- 2 D 20 マグマ成因論に関するダイアグラムの元素の分配係数による分類(地調) 富樫茂子
- 2 D 21 ジルコン結晶の着色と脱色の機構— γ 線, 紫外線及び可視光, 熱による効果—(学習院大理) ○古宇田 光・長沢 宏

第3日 11月7日(土)

A会場

一般講演 (9:00~9:45) 座長 渡辺修一

- 3 A 01 本邦大気中の水銀濃度分布(千葉大理) 中川良三
- 3 A 02 大気中のガス状微量金属化合物に関する研究(近畿大理工・近畿大教養) ○宮浦紀史・森田道隆・中口 譲・重松恒信・平木敬三
- 3 A 03 溶存酸素の連続測定値から推定した実験池のガス交換速度(国立公害研・筑波大) ○河合崇欣・菊地京子
- (9:55~10:40) 座長 中川良三
- 3 A 04 気象観測用鉄塔(213m)を用いた化学成分の鉛直分布に関する研究(気象大学校・気象研・国立公害研) ○土器屋由紀子・別所進一・池上三和子・功刀正行・溝口次夫
- 3 A 05 多摩川流域における大気降下物全量(東京農工大農) ○小倉紀雄・梅田和美
- 3 A 06 都市近郊の林地による大気浮遊粒子の捕集(東工大総合理工) ○吉田 聡・一國雅巳
- (10:50~12:05) 座長 角皆静男
- 3 A 07 海洋大気上の微量成分の大気濃度及びその挙動—ハワイ, オアフ島における大気調査(1)(慶大理工・ロードアイランド大) ○井口勝・池内祥浩・尾上 勉・伊藤 温・丸尾和生・米原秀和・田中 茂・橋本芳一・T. Patterson・R. A. Duce
- 3 A 08 海洋大気上の微量成分の大気濃度及びその挙動—ハワイ, オアフ島における大気調査(2)(慶大理工・ロードアイランド大) ○尾上勉・伊藤 温・丸尾和生・米原秀和・池内祥浩・井口 勝・田中 茂・橋本芳一・T. Patterson・R. A. Duce
- 3 A 09 海洋大気上における無機・有機ヒ素化合物の形態別測定(慶大理工・ロードアイランド大) ○中村 優・松園義明・田中 茂・橋本芳一・T. Patterson・R. A. Duce
- 3 A 10 エアロゾル試料の化学分析のための前処理(名大水圏研・国立公害研) ○金森 悟・金森暢子・伊佐恵理子・西川雅高
- 3 A 11 洋上のエアロゾルの化学成分(名大水圏研・国立公害研) ○金森 悟・金森暢子・伊佐恵理子・西川雅高
- (13:00~14:00) 座長 橋本芳一
- 3 A 12 大気中硫黄化合物の硫黄安定同位体比(名大理・三重県環境科学セ) ○大橋哲二・中井信之・塚田 進・山本晃道・渡辺将隆・高橋

- 正昭・長井喜久・北岡潔巳
- 3 A 13 洋上大気中の SO₂ の連続測定の試み(北大水産) 渡辺修一・○轟木朋浩・角皆静男
- 3 A 14 海水中における SO₂ の光化学的酸化反応(国立公衆衛生院) 原 宏
- 3 A 15 大気中および海水中の硫化ジメチル(北大水産) 渡辺修一・○出村光司・角皆静男
- (14:10~14:55) 座長 渡久山 章
- 3 A 16 西部北太平洋上の大気中メタン濃度について(気象研) ○松枝秀和・井上久幸・伏見克彦・杉村行勇
- 3 A 17 海洋大気中のヒドロキシ酸とケト酸: 光化学反応生成物(ウズホール海洋研) ○河村公隆・R. B. Gagosian
- 3 A 18 黄砂時のエアロゾルの有機物組成について(名大水圏研) ○大田啓一・増沢敏行・岩坂泰信
- (15:05~16:05) 座長 金森 悟
- 3 A 19 宇宙線生成核種・⁷Be の降下量と気象要素との関連(その2)(名大水圏研・名大理) ○小尻英博・加藤喜久雄・古川路明
- 3 A 20 エーロゾル, 降水中の ⁷Be, ¹⁰Be 濃度(弘前大理・南加大) ○中谷 周・日下部正志・T. L. Ku
- 3 A 21 大気中の核分裂生成物濃度の経年変化(名大理・名大アイソトープセ) 古川路明・○小島貞男
- 3 A 22 筑波の大気, 降水中で観測されたチェルノブイリ原発事故に由来する α -, β -放射体について(気象研) ○廣瀬勝巳・青山道夫・杉村行勇
- B会場
- 一般講演 (9:00~9:45) 座長 大隅多加志
- 3 B 01 150°C ~ 300°C における凝灰岩と海水の相互作用(函館工専・東北大) ○水上正勝・大森幸子・大本 洋
- 3 B 02 ケイ酸塩溶融体—熱水溶液系における硫黄化合物の分配(東工大理・千葉大理) ○坂本浩行・篠原宏志・飯山敏道・松尾禎士
- 3 B 03 ホウケイ酸ガラスの浸出に対する溶液組成の影響(東大海洋研) ○柳沢文孝・酒井 均
- (9:55~10:55) 座長 綿抜邦彦
- 3 B 04 長野市松代温泉の蒸発で析出するホウ酸とホウ酸塩について(小山高専) 芦沢 峻
- 3 B 05 草津・白根地区温泉水中の希土類元素の分布

- (II)(上智大理工・武蔵工大原研) ○垣花秀武・小坂知子・本多照幸
- 3 B 06 草津温泉の流動に関する考察(中央温研・銅管鉱業) ○佐藤幸二・佐藤政夫
- 3 B 07 中性子放射化分析法による Pr, Nd, Ho, Er の定量(武蔵工大原研・上智大理工) ○本多照幸・野崎徹也・垣花秀武
- (11:05~12:05) 座長 小坂文子
- 3 B 08 火口湖水の化学・秋田焼山火口湖について(東大教養) ○高野穆一郎・綿抜邦彦
- 3 B 09 摩周湖湖底における熱水徴候(1) 熱と溶存塩類の供給(国立公害研) ○野尻幸宏・河合崇欣・大槻 晃
- 3 B 10 摩周湖湖底における熱水徴候(2) 溶存ガス成分の濃度・同位体比異常(東大理・東大海洋研・国立公害研) ○五十嵐丈二・小嶋稔・石橋純一郎・蒲生俊敬・酒井 均・野尻幸宏・河合崇欣
- 3 B 11 摩周湖湖底における熱水徴候(3) —湖底堆積物中の活動記録—(国立公害研) ○田中敦・相馬光之
- (13:00~13:45) 座長 平林順一
- 3 B 12 講演中止
- 3 B 13 地熱地域間の土壌ガスの化学および同位体組成の比較(秋田大鉱山・九大機能研・岡山理大) ○北 逸郎・田口幸洋・長尾敬介
- 3 B 14 カメルーン・ニオス湖からの CO₂ ガス突出の原因について(岡山地球セ) 日下部 実
- (13:55~14:55) 座長 脇田 宏
- 3 B 15 地下流体はなぜ地殻応力に鋭敏なのか?(その2)(愛媛大理) 川辺岩夫
- 3 B 16 地球潮汐による地下水湧出量変化と貯留系岩石クラックの方位性(愛媛大理) ○灘野伸治・大野一郎・川辺岩夫
- 3 B 17 Ge(Int)検出器による松代地震断層のガンマ線探査(II)(防災セ) ○吉田則夫・塚原弘昭
- 3 B 18 能登半島・氷見の温泉ガス成分の変動と地震との関連(富山大理) ○水林 修・佐竹洋
- (15:05~16:05) 座長 相沢省一
- 3 B 19 炭酸カルシウムの生成および転移過程に及ぼすマグネシウムイオンの影響(新潟自然科学・新潟大理・新潟大工) ○萩野 健・鈴木俊雄・坂口雅一・澤田 清
- 3 B 20 炭酸カルシウムの表面電位に及ぼすリン酸化合物の影響(新潟大理) ○岡田昌二・鈴木

- 俊雄・澤田 清
- 3 B 21 ポリリン酸による炭酸カルシウムの結晶成長阻害機構(新潟大理) ○関野博一・鈴木俊雄・澤田 清
- 3 B 22 オルトリン酸の炭酸カルシウムへの吸着平衡(新潟大理) ○澤田 清・猪股茂博・鈴木俊雄
- (16:15~17:00) 座長 澤田 清
- 3 B 23 固体表面上に固定されたフルボ酸の重金属イオンとの錯形成能(東工大総合理工) ○山口恵美・鶴見 実・一國雅巳
- 3 B 24 アブダビ地区上部ジュラ系石灰岩・ドロマイト岩の生成・続成過程における微量元素の地球化学的挙動(群馬大工・アブダビ石油) ○相沢省一・鈴木正義・赤岩英夫
- 3 B 25 石コウー硬石コウ転移におけるストロンチウムの行動(東邦大理) ○三好登和子・今橋正征・甲木和子

C会場

一般講演 (9:00~10:00) 座長 村山治太

- 3 C 01 南極 Victoria Land・Rabyrinth 地域湖沼の塩起因一ホウ素, リチウムからの考察(東邦大教養・弘前大理・日本分析セ) ○高松信樹・中谷 周・鳥居鉄也
- 3 C 02 地下水中の化学成分濃度変化と地殻変動一六甲山系を例として一(京大防災研・神戸大工・京大理) ○吉岡龍馬・沖村 孝・小泉尚嗣
- 3 C 03 野川流域の湧水, 地下水中のラジウム, ラドンとその崩壊生成物について(都立大理・原子力安全技セ) ○堀内公子・村上悠紀雄
- 3 C 04 大阪層群(鮮新・更新統)の浅層地下水の水質一神戸西部の場合一(甲南大理) ○日下譲・辻 治雄・玉利祐三・三宅周子
- (10:10~11:10) 座長 鶴見 実
- 3 C 05 水酸化ジルコニウム共沈法による地下水中のセレンの状態分析一溶存成分間の濃度相関性一(甲南大理) ○玉利祐三・平井利恵・辻治雄・日下 譲
- 3 C 06 琵琶湖におけるセレンの分布に及ぼす微生物の影響(近畿大理工・近畿大理工総研) ○青野辰雄・長井貴之・中口 譲・藤野 治・平木敬三
- 3 C 07 手賀沼水域の溶存物質について(埼玉大工・千葉大工) ○君島克憲・立本英機・小沢竹二郎

- 3 C 08 富士五湖と富士山周辺の湧水の化学成分について(神奈川温研) ○鈴木孝雄・平野富雄・大木靖衛
- (11:20~12:05) 座長 玉利祐三
- 3 C 09 琵琶湖水中における微量元素の分布(京大教養・京大化研) ○杉山雅人・安田憲康・向井浩・木原壯林・松井正和
- 3 C 10 浜名湖ボーリングコアから得た間隙水について(東海大海洋・静大理) ○加藤義久・和田秀樹
- 3 C 11 溶媒抽出一原子吸光分析法による天然水中のカドミウムの定量と分布(近畿大理工・近畿大理工総研・京大教養) ○古賀康夫・藤野治・杉山雅人・山中勝也・平木敬三
- (13:00~13:45) 座長 吉岡龍馬
- 3 C 12 天然水中の溶存ガスの迅速分析法(名大理) ○杉崎隆一・滝 清子
- 3 C 13 濃尾平野 3 大河川の酸素同位体組成および主要化学成分の季節変動(岐阜衛生研・岐阜公害研・名大水圏研) ○寺尾 宏・森下有輝・加藤喜久雄
- 3 C 14 多摩川上流部における沢水中の化学成分に対する降下物の寄与(東工大総合理工) ○高橋章・鶴見 実・一國雅巳
- (13:55~14:40) 座長 堀内公子
- 3 C 15 山地小流域における河川流出への降水の寄与(名大水圏研・名大工) ○加藤喜久雄・渡辺茂・松林宇一郎
- 3 C 16 河川水中の微量元素の水生生物への取込み(都立アイソトープ研) ○山崎正夫・谷崎良之・下川利成
- 3 C 17 銅イオン選択電極を用いた河川水の錯体形成能力の評価(都立大理) 箕浦加穂・○福島和夫
- (14:50~15:35) 座長 高岡宣雄
- 3 C 18 岩石破壊に伴い発生するガスについての考察(名大理) ○永峰康一郎・杉崎隆一
- 3 C 19 トレーサーとして希ガスを利用した岩盤浸透流の流速について(名大理) ○青木隆明・杉崎隆一
- 3 C 20 アモルファスシリカ中の希ガス(神戸大理・岡山理大・秋田大鉦山・九大生産研) ○松原佳代・長尾敬介・松田准一・北 逸郎・田口幸洋
- (15:45~16:45) 座長 松田准一
- 3 C 21 ダイヤモンド中の希ガス拡散(東大理) ○小嶋 稔・座主繁男

- 3 C 22 石英に含まれる二酸化炭素流体包有物中の希ガス(東大理・オタワ大) ○豊田 新・服部恵子・小嶋 稔
- 3 C 23 単斜輝石一玄武岩質メルト間の希ガスの分配係数(東大理) 比屋根 肇
- 3 C 24 地球大気の起源:希ガスからの制約条件(東大理) ○小嶋 稔・五十嵐丈二

D会場

一般講演 (9:00~9:45) 座長 坂田 朗

- 3 D 01 重力場の下での気体の熱平衡状態について(学習院大理) ○木越邦彦
- 3 D 02 メリライト中の酸素の自己拡散係数(筑波大・東大アイソトープセ・学習院大理) ○塚本尚義・森岡正名・長沢 宏
- 3 D 03 メリライト中に於る陽イオン拡散(東大アイソトープセ・学習院大理) ○森岡正名・井草徹・長沢 宏
- (9:55~10:55) 座長 長沢 宏
- 3 D 04 Tieschitz (H3) 隕石中のコンドリュール・リム・コアおよびマトリックスの希土類元素の分布(神戸大理・神戸大自然科学)中村昇・○野田真治・永本浩之・西川賢之・三澤啓司
- 3 D 05 Felix (C03) コンドリュールの難揮発性前駆物質(神戸大自然科学・神戸大理) ○三澤啓司・中村 昇
- 3 D 06 “始源的角レキ岩化コンドライト”の重要性一Hedjaz (L) コンドライトの場合(神戸大理・神戸大自然科学・京大理) ○中村昇・三澤啓司・北村雅夫
- 3 D 07 エンスタタイト・コンドライト中の微量元素存在度(群馬大教養・群馬大工) ○海老原充・根本明彦・赤岩英夫・北村雅夫
- (11:05~12:05) 座長 長尾敬介
- 3 D 08 コンドライト中の金属の分離(日大文理) ○本田雅健・永井尚生
- 3 D 09 コンドライトを用いた, カンラン石, 金属相, 液相における元素分配の実験的研究(東大理) ○斉藤 努・清水 洋・増田彰正
- 3 D 10 炭素質コンドライト中の有機高分子物質の生成過程(東大理・日大獣医) ○村江達士・増田彰正・高橋武美
- 3 D 11 Point of Rocks (L6) における若い衝突年代について(神戸大理・京都産大教養・ニューメキシコ大) ○藤原敏記・中村 昇・能田成・K. Keil

(13:00~14:00) 座長 赤岩英男

- 3 D 12 ダイオジェナイトに関する年代学的及び化学的研究(東大理) ○高橋和也・清水 洋・増田彰正
- 3 D 13 隕石物質を用いたアルカリ元素に関する蒸発実験(神戸大理) ○島岡太郎・中村 昇
- 3 D 14 隕石物質中の希土類元素および主成分元素の蒸発過程に関する実験的研究(東大理) ○米田成一・清水 洋・増田彰正
- 3 D 15 Allende 隕石の炭素質物質(東大理・日大農獣医) ○北島富美雄・村江達士・清水洋・高橋武美・増田彰正
- (14:10~15:10) 座長 森岡正名
- 3 D 16 隕石中のダイヤモンドの起源 (I) (神戸大理・岡山理大・東大教養) ○福永一哉・松田准一・長尾敬介・宮本正道・伊東敬祐
- 3 D 17 隕石中のダイヤモンドの起源 (II) (神戸大理・岡山理大・東大教養) ○松田准一・福永一哉・長尾敬介・宮本正道・伊東敬祐
- 3 D 18 南極隕石の希ガス同位体研究(岡山理大・神戸大理・山形大理) ○長尾敬介・松原佳代・佐川 斉・中村弥生
- 3 D 19 KT 境界から採取された堆積物のヘリウム同位体比(東大理・ローマ大・地震研) ○甘利幸子・小嶋 稔・S. Lombardi・浜野洋三
- (15:20~16:20) 座長 海老原 充
- 3 D 20 地球キセノンと炭素質隕石キセノンの比較(東大理) ○五十嵐丈二・小嶋 稔
- 3 D 21 南極 C2 コンドライトの有機化合物(筑波大) ○下山 晃・奈良岡 浩・古宮正利・原田 馨
- 3 D 22 CGAS (Cooled Grating Array Spectrometer) を用いた星周塵の赤外 3 μm の高分解能観測(電通大・東大・ハワイ大) ○坂田 朗・和田節子・中田好一・尾中 敬・A. T. Tokunaga・K. Sellgren・長田哲也
- 3 D 23 急冷炭素質物質 (Quenched Carbonaceous Composite; QCC) から推定した星周塵の化学構造(電通大) ○坂田 朗・和田節子

講演要旨集

3,500円(送付のみ可)

申込先

〒143 東京都大田区大森西 5-21-16 東邦大学医学部内 1987年度日本地球化学会年会準備委員会委員長 相川嘉正

マン・システム・インターフェース(人間と高度技術化社会)特別委員会設置さる

昭和62年 8 月 日本学術会議広報委員会

日本学術会議では、特別委員会が追加設置され、活動を開始しました。また、現在第14期（昭和63年 7 月22日より 3 年間）会員の選出手続きが進められています。今回の「日本学術会議だより」では、これらの概要に加えて、来年度に開催される共同主催国際会議及び研究連絡委員会報告等についてお知らせします。

マン・システム・インターフェース（人間と高度技術化社会）特別委員会

日本学術会議は、昭和62年 4 月の第102回総会において新たに「マン・システム・インターフェース（人間と高度技術化社会）特別委員会」を設置した。

高度な技術革新とその急速な浸透により、現代の社会はいわゆる「高度技術化社会」ということができる。すなわち、今日社会の各分野で、化学プラントや原子力発電所等に見られるごとく「システムの巨大化」が進むとともに、OA 機器などのように「高度技術の大衆化」等も起こっている。

「高度技術化社会」においては、機械システム又はソフトシステムに対する人間の役割が、従来のものと大幅に変化しており、人間は新たに重要な役割を担うようになってきている。これらの人間の役割を軽減したり代替するため

に各種のインターフェースが設計され、整備されている。これらのインターフェースは、人間—システム系の信頼性・安全性を高める上で極めて重要である。従って「高度技術化社会」を維持・発展させるためには、この方面の研究、開発が今後ますます重点的に行われなければならない。

しかし、現実には「高度技術化社会」における「システムの巨大化」や「高度技術の大衆化」に対して、人間は個人としても、社会としても、必ずしも十分な対応・受容ができていない。人間の能力を超えるシステムが技術的に実現したことによって、かえって人間としての生甲斐を喪失する人も一部に生じている。その結果、いわゆるテクノストレスの状態に陥ったり、人間味の喪失による不適応状況に悩む者が増加している。これはまた、人間—システム系のヒューマン・エラーによる大事故の一因ともなっている。また「高度技術化社会」から取り残されたと感じる人々の中には、種々の回避的ないし攻撃的な不適応行動を呈する者もみられ、今後、大きな社会問題となることが予想される。

「高度技術化社会」では、以上のような諸問題に対する対処策ないしは予防策のみでなく、人間性の回復・維持の問題を含めて、十分な対応が講ぜられる必要がある。

以上の観点に立つて、このような問題を学際的かつ総合的に検討するために特別委員会を設置することとした。

日本学術会議第13期は、その活動期間を 1 年余残すのみになっているが、この問題の重要性に鑑み、期の途中であるが着手することとした。

日本学術会議会員選出制度

日本学術会議は、210人の会員をもって組織されているが、その会員は次の手続きにより選出（推薦）される。現在第14期会員（任期：昭和63年 7 月22日から 3 年間）を選出（推薦）するための手続きが進められているところである（**手続概略**）

- 1 会員の候補者を選定し、及び推薦人（会員の推薦に当たる者）を指名することを希望する学術研究団体は、日本学術会議に登録を申請する（昭和62年 6 月30日締切り）。申請する場合には、その学術研究団体の目的とする学術研究の領域と関連する研究連絡委員会を届け出なければならない。届け出られた研究連絡委員会が「関連研究連絡委員会」（3 参照）である。
- 2 関連研究連絡委員会により区分された学術研究の領域（以下「学術研究領域」という。）ごとに、会員の候補者及び推薦人を届け出ることになる。
- 3 日本学術会議会員推薦管理会は、この申請を審査し、その学術研究団体が所定の要件を満たすものであるときは、関連研究連絡委員会その他の事項に登録する。登録された学術研究団体が「登録学術研究団体」である。
- 4 登録学術研究団体が届け出た関連研究連絡委員会が多数あるときは、日本学術会議会長は、登録学術研究団体の意見を聴いて関連研究連絡委員会を限定（指定）する（11月30日までに指定）。
- 5 登録学術研究団体は、その構成員である科学者のうちから、会員の候補者を「学術研究領域」ごとに選定し、日本学術会議に届け出る（昭和63年 2 月 1 日締切り）。
- 6 日本学術会議会員推薦管理会は、届け出られた会員の候補者が会員の資格を有する者であるかどうか認定する。
- 7 登録学術研究団体は、その構成員である科学者のうちから、推薦人を「学術研究領域」ごとに指名し、日本学術会議に届け出る（2 月20日締切り）。
- 8 推薦人は、「学術研究領域」ごとに、日本学術会議会員推薦管理会が会員となる資格を有すると認定した会員の候補者のうちから、会員として推薦すべき者及び補欠の会員として推薦すべき者を選考・決定する（5 月中旬～6 月上旬）。
- 9 推薦人は、会員として推薦すべき者及び補欠の会員として推薦すべき者を、日本学術会議を経由して、内閣総理大臣に推薦する（6 月中旬）。
- 10 内閣総理大臣は、その推薦に基づいて、会員を任命する（7 月22日）。

昭和63年度共同主催国際会議

本会議は、昭和28年以降毎年おおむね 4 件の学術関係国際会議を開係学術研究団体と共同主催しているが、昭和63年度は次の 4 国際会議を我が国において開催することとした。（昭和62年 6 月16日（火）閣議了解）

国際家族法学会第 6 回世界会議

開催期間：昭和63年 4 月 6 日～12日

開催場所：日本大学会館（東京都）

共催団体：日本家族〈社会と法〉学会

第 9 回世界地震工学会議

開催期間：昭和63年 8 月 2 日～9 日

開催場所：ホテルニューオオタニ（東京都）、国立京都国際会館（京都市）

共催団体：土木学会、日本建築学会、土質工学会、日本機械学会、地震学会、震災予防協議会

第 8 回国際内分泌学会議

開催期間：昭和63年 7 月17日～23日

開催場所：国立京都国際会館（京都市）

共催団体：日本内分泌学会

第 5 回国際植物病理学会議

開催期間：昭和63年 8 月20日～27日

開催場所：国立京都国際会館（京都市）

共催団体：日本植物病理学会、日本植物防疫協会

我が国の理科教育について（意見）

—日本学術会議科学教育研究連絡委員会報告—

本研究連絡委員会は、かねて我が国と世界各国との学校における理科教育の実態について関心を持ち比較を行ってきたが、昨年教育課程審議会の発表した教育課程改定の大綱に関する中間報告と各教科の時間数に関する試案は、我が国の理科教育の世界の動向からの逸脱をはっきりさせたものとして、深い憂慮の念を示すものである。

意見（要旨）

第 2 次大戦後、科学技術立国は我が国の国是であった。この方向に資するため、我が国は学校における理科教育の振興に努め、大学における科学・技術の教育・研究にも多大の力を注いできた。しかるに、現今の国の施策を見ると、上述の方向とは逆行するものが増えていると言わねばならない。今回の中間報告に見られる小学校低学年理科の廃止、小学校から中学校まで 9 年間の理科の時間数は昭和43年に比べて 6～7 時間の減、高等学校においては、昭和35年に 6 単位（4 科目必修）が昭和53年に 4 単位（理科 I のみ必修）となり今回もそれが引き継がれようとしている。

学校教育における時間数の削減は必ずしも他の教科になかった現象ではないが、理科においてその減少が特に顕著であった。我々はこの点について強い危機感を抱くものであるが、その理由は理科に関する教育は児童・生徒の心身の発達に見合って、その内容を設定していく必要があるからで、時間数の削減がその適期を逸する恐れが強くなったからである。我々は、今後の理科教育において次の手当がなされるべきであると考え。

- 1 小学校においては、健全な自然観の育成を目標とし、低学年の理科も存続させる。
- 2 中学校・高等学校においては、科学技術に生きる人間としての能力を育成するため充分の時間を確保する。

地区会議活動について

日本学術会議は、全国を、北海道、東北、関東、中部、近畿、中国・四国、九州・沖縄の 7 ブロックに分け、「地区会議」を組織している。

これらの地区会議は、運営審議会附置広報委員会の下に置かれ、学術会議の各部・委員会等の活動状況を各地区内の科学者等に周知し、また、学術会議に対する意見、要望を汲み上げて、学術会議と科学者との意志疎通を図るとともに、地域社会の学術の振興に寄与することを目的としている。

各地区会議は、原則として、当該地区に居住、あるいは勤務している学術会議会員の中から各部（第 1 部～第 7 部）1 人ずつ計 7 人をもって構成することとされているが、該当する会員全員を構成員としている地区も多い。また、部によっては、該当する会員のいない地区があり、その場合には研究連絡委員会委員を構成員としている。

各地区会議は、構成員である会員の中から代表幹事 1 人（関東地区のみ 2 人）を選び、その主宰者としている。

さらに、各地区会議には、その活動に関する事務を処理するために、「地方連絡委員」を置いている。この地方連絡委員には、北海道地区会議は北海道大学、東北地区会議は東北大学、中部地区会議は名古屋大学、近畿地区会議は京都大学、中国・四国地区会議は広島大学、九州・沖縄地区会議は九州大学の事務局長以下 6～10 人の職員が委嘱されている。各地区会議は、これらの各大学事務局職員の多大な協力の下に運営されているのである。

各地区会議は、前述の目的を果たすために、科学者との懇談会・学術講演会等の開催、地区会議ニュースの発行等の事業を活発に行っている。先般、運営審議会で決定された今年度の各地区会議事業計画によると、全国各地で、科学者との懇談会は 12 回、学術講演会は 14 回それぞれ開催される予定である。

日本学術会議主催公開講演会

本会議は、学術の成果を広く国民生活に反映浸透させるという日本学術会議法の主旨に沿うため、公開講演会を主催していますが、昭和62年度には、本会議会員（演者）による公開講演会を次のとおり 3 回企画しています。

開催日・演者等詳細は決定次第新聞広告等でお知らせする予定ですが、多数の方々のご来場をお願いします。

テーマ 1：「高度情報化社会」に関するもの

開催地 東京

テーマ 2：「科学の進歩と人間社会」に関するもの

開催地 京都

テーマ 3：「マン・システム・インターフェース」に関するもの

開催地 東京

多数の学術研究団体の御協力により、「日本学術会議だより」を掲載していただくことができ、ありがとうございます。

なお、御意見・お問い合わせ等がありましたら下記までお寄せください。

〒106 港区六本木 7—22—34

日本学術会議広報委員会

（日本学術会議事務局庶務課）

電話 03 (403) 6291

会員からの手紙

地球化学の「原典」と「原点」の地球化学
—「化学の原典，地球化学」を読んで—

愛媛大理学部 川辺岩夫

日本化学会編集による「化学の原典」シリーズの一分冊として、「地球化学」が出版された。ここには、(1) Goldschmidt「元素の地球化学的分配」、(2) Clarke「地球化学のデータ」、(3) Richards「窒素と銀の原子量」、(4) Urey「重水素の発見」、(5) Libby「宇宙線による ^{14}C 」、(6) Vernadskiiの著書「地球化学」の全訳・抄訳がまとめられている。各々の邦訳には、訳出にあられた碩学の解説も付されており、原典の歴史的・今日的意義を理解する上で大いに助けとなる。

親石、親銅元素などの述語は知ってはいるものの、これらが最初に使われた文献にまでさかのぼって、その内容を理解しようという気には仲々なれない。この事情は古典的論文一般に対してもあてはまる。古い文献の入手は必ずしも容易ではないこともあるが、筆者の場合は、第二外国語の亡霊とは対面したくないとの気持ち強いからである。その意味で、この「化学の原典」シリーズや「物理学古典論文叢書」シリーズ（東海大出版会）は大変貴重で、個人的にも何冊か購入している。

テキストから学ぶ科学上の概念や述語は、多くの場合、客観的・中性的な響きを有しているように感じる。しかし、これらが初めて提唱された時代にさかのぼった時、その響きはすこぶる個性的で主意的でさえないのではないだろうか。地球化学の「原典」を読んでもこの感強い。Goldschmidtの4つの地球化学的元素群は、彼自身の「地球の物質代謝論」を展開する為の基本概念であった。また Vernadskiiは「……当時の化学者の興味は地球化学的側面から遠ざかり、元素およびその化合物の性質の研究のみが強調され、化学と地質学との間には、当時流行の専門科学の細分に助長されて越えることが出来ないほどの溝が出来てしまった。メンデレーエフなどはその業績からみて当時の化学者としては異例である」と述べ、彼の地球化学提唱の背後には、旧来化学への批判があることを隠そうとはしていない。さらに、「科学調査においては、すべての証拠が価値をもつものである」と淡々と記す Clarkeの筆致も、別の意味では、大いに個性的とも言えよう。

ここに収録された6編すべてが、地球化学の「原典」としてそれにふさわしいとするには、多少意見の相違があっても良いように感じるし、何よりも邦人先達の

論文がこの6編には含まれていないことにもある種の感慨を覚える。しかし、これらの地球化学の「原典」が、「原点」の地球化学とは何であるかを考えさせてくれるに足る充分すぎる内容を有していることは間違いない。この小冊子が本会会員はじめ多くの読者を得ることを願いたい。

※

第4回加速器質量分析国際シンポジウムに出席して
名古屋大学アイソトープ総合センター 中村俊夫
第4回加速器質量分析国際シンポジウムが1987年4月27日から30日までの4日間、カナダのナイヤガラ・オン・ザ・レイクで開催されました。今回は、加速器質量分析法（天然の極微量核種の直接計数法）の実用性が示され、一連の研究成果が Science 誌上に発表された1977年から数えてちょうど10周年ということで ANNO DECIMO セッションが特別に企画され、加速器質量分析法の初期の開発研究に携わった研究者による講演が行われました。新技術と新しい研究分野の開拓に参加した人々により当時の研究状況が生々しく語られ、非常に感動しました。夕方、霧雨の中でナイアガラ滝をバスツアーしたあと、夜9時30分からのセッションは開始され、11時近くまで続きましたが、途中で退席する人はほとんどなく、聴衆は熱心に聞き入っていました。

このシンポジウムの参加者は世界各国から150名にのぼり、日本からは東大タンデム・名大タンデトロン、および阪大サイクロトロン加速器施設から6名（研究発表数6件）が参加しました。全体で口頭発表62件、ポスター発表45件でした。内容的には、技術報告が37件、応用研究報告が57件、放射能測定法を含むレビュー報告が13件ありました。この様に加速器質量分析法は既に確立された方法として、種々の天然物試料に対して応用が試みられ、多くの成果が得られつつあります。また一方では、新しく別な核種の測定や測定精度の向上のための技術改良も精力的に行われています。

一方、核種別に発表件数をみると（重複しているものもある） ^{14}C (42件)、 ^{10}Be (27)、 ^{36}Cl (17)、 ^{26}Al (10)、 ^{41}Ca (6)、 ^{129}I (6)、 ^{32}Si (4)、その他 (14) であります。やはり、天然の極微量試料に対する ^{14}C 年代測定の研究が最も多く見られます。また、環境試料中の ^{10}Be 、 ^{26}Al 、 ^{32}Si 、 ^{36}Cl 、 ^{41}Ca 、 ^{129}I 等の濃度測定のデータが蓄積され、 ^{14}C と同様にこれらの核種を年代測定に応用するための検討が加えられています。このシンポジウムの研究報告は、本年11月に Nuclear

Instruments and Methodsに印刷される予定です。

現在日本で加速器質量分析が定常的に行われているのは、東大タンデムと名大タンデトロン加速器施設のみであります。この分野の研究が広く進展しない原因の1つは加速器を運転する側（物理家）と測定結果を利用する側（地質家、考古学家、地球・宇宙化学家）との間のギャップだと思います。最近、日本の大学や研究機関では加速器の設置が増加しているように見えます。今後、両者のギャップを解消し、この学際的研究が日本でも盛んになることを期待する次第です。

※

IGC 日本開催準備状況報告

IGC 準備委員会委員長 飯山敏道

日本学術会議地質学研究連絡委員会は、1982年いらい国際地質学会議 (IGC) を1992年に日本で開催することについて、その学問的・社会的意義とその可能性などを検討する小委員会を設け、審議をかさねました。その結果、IGCはその開催方式や内容をいままでのIGCの慣例に固執することなく、日本独自の方式を開拓し、準備を周到におこなえば、技術的にも可能であり、意義深いものにすることができるとの結論に達しました。そこで、1984年モスクワのIGCにおいて、日本誘致を提案いたしました。このとき、中華人民共和国も誘致を提案したため、1985年2月に、IUGS・IGC共催のSteering Committeeは、1992年日本開催に同意し、1996年中国での開催を勧告いたしました。正式には1989年のワシントンのIGCで決まることですが、1985年4月IGC検討小委員会は発展的に解散し、地質学関連の大学・官庁・企業から派遣された委員によって、日本学術会議からは独立したIGC準備委員会が発足いたしました。

この委員会は1989年ワシントンで開催される第28回IGCにおいて、日本開催が正式に決定され、IGC組織委員会が発足するまで機能し、準備を整える役割をもっています。正式承認まえの準備会であるため、公的な機能をもつことができませんが、準備委員会内に設けられた総務・プログラム・巡検・会場・経理・出版の各小委員会が準備を進めておりますので、ここに、活動状況を報告します。正式承認後開催まで3年の歳月しかありません。準備委員会は可能なかぎり準備を整えて1989年に発足するはずの組織委員会に引き継ぎたいと考えています。準備委員会の活動に御意見をお寄せくださるなど、各位の絶大なる御協力をお願いいたします。

第29回 IGC 日本開催準備状況

IGC 1992年日本開催に関する各分野の基本的な考え方と準備の進捗状況の概要は以下の通りである。

1. セッションの形態

イ. 学術セッションは約150前後の日本で計画するシンポジウムとIUGS傘下の学術連合から提案されるテーマによるシンポジウムを主体として構成されることとする。1989年に行われる第28回IGC（米国ワシントンD. C.）のfirst circularを見ても、この方式が最も適当であると考えられる。
ロ. 講演とは別の形の意見交換、個人的接触を求める人達のために、ポスターセッションを大規模に行う。

2. プログラム

イ. メインテーマは世界における日本の地質学的位置にかんがみ、島弧、大陸周縁が最も適しており、また諸外国の研究者、学者もこれを望んでいる。
ロ. これとともに、新しく生まれつつある分野、たとえばCosmogeologyなどを主題にしたシンポジウムを設ける。
ハ. 日本の地質、地質構造に関する啓蒙的で、up-to-dateな内容のシンポジウムを計画する。
ニ. 準備委員会が用意するシンポジウムのテーマを100前後にする。IUGS関連の諸学術連合からの提案を合せて150前後のシンポジウムが行われる。
ホ. 以上の基本的な考え方のもとに
構造地質学 (I)・構造地質学 (II)・火山学および火山岩石学・変成岩岩石学・火成岩岩石学・古生物学・堆積学・環境地質学・地質災害・海洋地質学・鉱床学・鉱物学の諸分野のプログラム検討責任者からなるプログラム小委員会を設け、テーマの提案を募っている。かなりのテーマが集まった段階で、地球物理学・地球化学のテーマの収集を行う。

ヘ. 現在までに構造地質学 (I)・(II)・変成岩岩石学・堆積学の諸分野からは第1次提案が提出され、その総数60余になっている。集まったテーマはデータベースに逐次入力している。
ト. 以上のほか、開会式に引き続き半日ないし一日、各分野の重要な学者による、地球科学のretrospectiveおよびprospectiveについての講演からなる、コロキウムを開催する。

3. 巡検

イ. 日本を北海道・東北・関東・中部・近畿・中国・四国・九州・琉球の8地区に分け、複数地域にまたがるテーマとして火山・鉱床・変成帯・島弧・応用地質・燃料地質・災害地質の7テーマを

決定し、それぞれに責任者をおき、可能な巡検コースを検討中である。

ロ。現在全部で約90コースが提案され、検討されている。

ハ。本年一杯各種提案を集めたくえで討論し、1988年から具体的な検討に入る。

4. 会場

イ。当委員会発足当時は首都圏にはホテル以外に適当な会場がなかったが、1989年には幕張メッセ、1990年には首都国際会議場（横浜桜木町）が完成する見通しとなった。

ロ。以上を含め、会場を検討決定する。

5. 出版

日本の地質を紹介する出版物・地図を参加者全員に配布する方向で検討して行く。

6. First Circular

以上の活動は、1989年の第28回 IGC で正式に日本開催が決定した後1989年末発送の予定で実施する。

7. 準備委員会運営経費

上記の活動はすべて各委員の自己負担で実施して来た。今後の財政計画を目下検討中である。

プログラム小委員会

委員長	久城 育夫*
委員長補佐	歌田 実
変成岩および変成帯	坂野 昇平
火山学および火山岩	青木謙一郎
火成岩	久城 育夫
堆積学	岡田 博有
構造地質学	水谷伸治郎
〃	植村 武
地質学一般	鎮西 清高
古生物学	斎藤 常正
鉱床学	石原 舜三
鉱物学	丸茂 文幸
環境地質	小島 圭二

*1987年4月 飯山敏道 より引き継ぐ

巡検小委員会

委員長	諏訪 兼位
A. 地域別	B. テーマ別
北海道 加藤 誠	火山 宇井 忠英
東北 斎藤 常正	鉱床 島崎 英彦
関東 斎藤 靖二	変成帯 小松 正幸
中部 水谷伸治郎	島弧 斎藤 靖二
近畿 井本 伸広	応用地質 未定
中国 沖村 雄二	燃料地質 〃
四国 鈴木 堯二	災害地質 〃

九州・琉球 柳 哮	
出版小委員会	委員長 石原舜三
会場 〃	〃 佐藤 正
会計 〃	〃 濱田隆士
総務 〃	〃 嶋崎吉彦

IGC 準備委員会委員 (1987年6月)

荒牧重雄	東京大学地震研究所03-812-2111(勤務先)
飯山敏道	千葉大学理学部地学教室
(委員長)	0472-51-1111 ext. 2641, 2644
石原舜三	工業技術院東北工業技術試験所
	0222-37-5211
上田誠也	東京大学地震研究所
	03-812-2111
垣見俊弘	工業技術院地質調査所
	0298-54-3500
久城育夫	東京大学理学部地質学教室
	03-812-2111
小松直幹	帝国石油株式会社 常務取締役
	03-466-1231
近藤皓二	住友金属鉱山株式会社・常任顧問
	03-436-7744
斎藤常正	山形大学理学部地球科学教室
	0236-31-1421
佐藤 正	筑波大学地球科学系
	0298-53-4307
柴崎達雄	〒350-02 埼玉県入間郡鶴ヶ島藤金 182-1
	0492-85-1540
嶋崎吉彦	工業技術院地質調査所
	0298-54-3590
砂川一郎	東北大学理学部岩石鉱物鉱床学教室
	0222-22-1800
諏訪兼位	名古屋大学理学部地球科学教室
	052-781-5111 ext.2530,2531
奈須紀幸	放送大学
	0472-76-5111
野沢 保	〒158 東京都世田谷区弦巻3-5-7
	03-429-1723
濱田隆士	東京大学教養学部宇宙地球科学教室
	03-467-1171
坂野昇平	京都大学理学部地質学教室
	075-751-2111
広渡文利	九州大学理学部地質学教室
	092-641-1101

環境科学シンポジウム1987年開催のお知らせ

標記シンポジウムが同実行委員会の主催で11月25日(水)～27日(金)に東京虎ノ門パストラル(港区虎ノ門4-1-1, 電話03-432-7261)において開催されます。一般講演(発表時間15分の予定)の申込締切は9月30日(水)です。発表希望者はB5判400字詰原稿用紙1枚に、題目、研究者名(所属、発表者に〇印)、発表希望分野(詳細については主催者に問合

せのこと)、連絡先を書いて実行委員会あてお送り下さい。

申込及び問合せ先：〒305 茨城県新治郡桜村 筑波大学大学院環境科学研究科内環境科学シンポジウム実行委員会 委員長 山中啓教授(電話 0298-53-4752, 6598)

1987年度第1回日本地球化学会評議員会議事録

日時：1987年2月7日 15時～17時30分

場所：赤門学士会館

出席者：増田彰正会長、一國雅巳副会長、大隅多加志、梶原良道、金森 悟、兼岡一郎、酒井 均、佐藤和郎、清水 洋、杉崎隆一、坪田博行、野崎義行 松葉谷 治、松本英二 各評議員

議事にさきだって、吉田尚弘会員のオブザーバーとしての出席を了承し、本日欠席の水谷義彦評議員に代わって1986年度年会の報告をしていただくこととした。

I. 前回の議事録を一部字句の修正の上、承認した。

II. 報告事項

1. 幹事会(大隅評議員)

*1986年12月6日東京大学理学部化学教室で、おこなった。名誉会員への年会の際の対応について従来の例を確認し、要旨集を送呈する件については、行事委員の申し送り事項として、毎年、の年会実行委員長あて確実に伝達することを申し合わせた。

2. 庶務(大隅評議員)

*昭和62年度文部省科学研究費補助金「研究成果公開促進費」の申請を例年のとおりおこなった。

3. 会計(清水評議員)

*昨年度決算をとりまとめ中である。会費値上げの年であり大幅の繰越金が本年度に対して期待できる。
*今年度の評議員会出席の旅費支給は前年度の例にならうこととした。

4. 編集

(一國副会長)

*G. J. Vol. 20(5)については印刷が近日中に完了する。6号は3月半ば完成予定である。

*本年度になってからの投稿はすでに8編。好調である。

*Vol. 21(1)には、昨年度年会の英文プログラムを掲載する。各巻1号に掲載するのを例とした。(石渡評議員に代わって大隅評議員)

*『地球化学』20巻第2号は印刷中で総頁数約60、2月中に発行できる。内容は1986年度年会課題討論からのExtended Abstracts7編と原著論文4編。

*手持ちの原稿は4編であり、さらに1、2論文を加え21巻1号を6月に発行したい。

*今後、『地球化学』誌には原著論文ばかりでなく、総説、評論、解説、短報などを積極的につくりたい。将来投稿数が増えた場合には、発行を年3回にすることも考慮したい。

(松久評議員に代わって清水評議員)

*ニュース109号は印刷中である。春季シンポジウムのプログラムを掲載している。

5. 行事

(水谷評議員に代わってオブザーバ吉田尚弘会員)

*1986年度年会は、1986年10月11日～13日に富山大学理学部において開催された。講演数228件、参加者345名(うち、学生79名)。

*年会決算の結果本会からの援助金20万円を返却することとした。

(相川評議員に代わって野崎評議員)

*1987年度年会は、1987年11月5日～7日に東京都大田区大森の東邦大学医学部において実施の予定。講演は、4会場。

6. IGBP 関係(増田会長)

*持回り評議員会の形でIGBPへの本会の取り組みについて各評議員の意見を聞いたが、全員の意見が「積極的に参加すべきである」とのことであった。

*おなじく持回り評議員会で了承の得られた本会IGBP委員会の設置については、委員長増田会長・幹事松本英二評議員で発足させた。

*以上を12月24日の日本学術会議第13期第2回地球化学・宇宙化学研究連絡委員会の席上報告した。

7. その他(増田会長)

*本会名誉会員渡辺武男氏は、1986年12月18日逝去された。葬儀に際し本会より生花弔辞を献呈した。謹んでご冥福をお祈りしたい。

III. 議事

1. 入退会(大隅評議員)

入会(9名)正会員：青野辰雄、大隅正春、神谷知子、齊藤 努、中井俊一、橋本晶夫、藤田玲子、陽 捷行、村田 守

退会(22名)

安藤重幸・井上克弘・岩越正文・葛城幸雄・桐山哲也・小泉光恵・国分信英・齊藤浩子・佐藤博之・実政 勲・重原好次・高橋一暢・竹内丑雄・立見辰雄・堤 充紀・中村誠佑・橋本卓三・浜地忠男・宮

川邦彦・山県 登・吉田幸人・和田弘昭

以上を承認。会員現況は以下のとおり

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1986年8月31日	885	13	7	905
入会	9	0	0	9
退会	22	0	1	23
1986年12月31日	872	13	6	891

2. 春季シンポジウムについて

*野崎評議員からの報告を了承した。実施は東京大学教養学部で1987年4月6日(月)10時~17時。懇親会は、17時30分から。

*会員外への宣伝に努めることとした。

3. 選挙管理委員会の設置について

*委員長に佐藤和郎評議員，委員に清水 洋・松久幸敬各評議員を選出した。

4. 岩石・水相互作用国際集会の剰余金(250万円)について，前例どおりの条件で，預託をうけることとした。

5. 学会賞の運用について

*受賞者選考細則等検討委員会からの「日本地球化学会学会賞等受賞者選考細則」の原案を一國副会長から説明。受賞候補者の推薦期日を毎年3月10日とする修正をくわえ，同細則を定めた。

*会長の提案による受賞者選考委員会委員長の委嘱について承認した。

*上記細則の規定にかかわらず，本年にかぎり以下の措置を特例的にとることを承認した。

○本年度の受賞者選考委員会委員の委嘱については，会長および同委員会委員長に一任する。

○本年度の受賞者選考は，日本地球化学会奨励賞についてのみ行うこととし，3月末日を期限とする会員からの受賞候補者の推薦受付を実施すること。

*日本地球化学会奨励賞受賞者には，講演をお願いすることは予定せず授賞の対象となった研究について『地球化学』誌に書いていただく。

6. その他

*IGBP，1988年度年会開催地，本会25周年などについて自由に意見を交換した。



編集者 松久幸敬

〒305 茨城県筑波郡谷田部町東1-1-3
地質調査所 鉱床部
電話 0298 (54) 3636

発行所 日本地球化学会

〒113 東京都文京区弥生2-4-16
学会センタービル(4F)
日本学会事務センター内
電話 東京03 (817) 5801

振込先銀行 三井銀行上野広小路支店
普通預金 口座番号 920-833

日本地球化学会ニュース

No. 112

1988. II. 12

1988年度日本地球化学会春季シンポジウム

主催 日本地球化学会

日時 4月7日(木) 10:00~17:00

会場 東京大学教養学部

東京都目黒区駒場3-8-1

(電話03-467-1171, 内線629 綿拔邦彦)

コンビーナ 綿拔邦彦・小倉紀雄・野崎義行・松久幸敬・大隅多加志

プログラム

午前の部 (10:00~11:50)		4) 海嶺における熱水活動と海洋地殻
あいさつ	10:00~10:10	——ODP Hole504B と Troodos Ophiolite, Cyprus
日本地球化学会会長 一國雅巳		15:20~16:10
1) 外洋大気中に存在する有機化合物の分布と		川幡穂高(地調)
その地球化学的意義	10:10~11:00	5) 南極・火山・地震——地球物理学の視点から——
河村公隆(都立大理)		16:10~17:00
2) 北太平洋上大気の化学成分:		神沼克伊(極地研)
NO ₃ ⁻ , ⁷ Be, Al, ²²² Rn	11:00~11:50	
植松光夫(北海道東海大)		懇親会(於 生協食堂) 17:30~19:00
ポスターセッションおよび昼食	11:50~14:00	懇親会に参加ご希望の方は，同封のはがきにてシン
午後の部 (14:00~17:00)		ポジウム事務局(東大教養 綿拔邦彦)までお申込み
3) 炭酸カルシウムにみられるイオン置換反応		ください。申込み締切 3月22日(火)。なお，会費
一國雅巳(東工大総合)		は当日会場にてお支払いください。会費 4,000円
休憩	15:00~15:20	ポスターセッション
		本年度からポスターセッションによる研究発表を公
		募いたします。発表ご希望の方は，シンポジウム事務
		局(同上)まで，発表者名と標題，および連絡先を記
		してお申込みください。申込み締切 3月22日(火)。

1988年度の日本地球化学会年会および総会は，10月12日(水)~14日(金)の期間，広島大学(広島市)で開催されます。本年は日本地球化学会発足25周年に当たりますので，皆さん奮ってご参加下さい。